

Title	高齢者対話におけるグラウンディング過程の観察的研究
Author(s)	竹岡, 篤永
Citation	
Issue Date	2002-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/373
Rights	
Description	Supervisor: 下嶋 篤, 知識科学研究科, 修士

修 士 論 文

高齢者対話におけるグラウンディング過程の観察的研究

指導教官 下嶋 篤 助教授

北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科知識システム基礎学専攻

050054 竹岡 篤永

審査委員： 下嶋 篤 助教授（主査）
杉山 公造 教授
石崎 雅人 助教授
藤波 努 助教授

2002 年 2 月

目次

1. はじめに	1
1.1 研究の動機	1
1.2 研究の目的	3
2. 高齢者の「ものわかり」について	5
2.1 高齢者の言語使用	5
2.2 対話を支える諸能力と加齢	7
2.2.1 記憶	7
2.2.2 聴覚	8
2.2.3 知能	8
2.2.4 感情表出	9
2.3 高齢者の自己イメージ	10
2.3.1 動機づけ	10
2.3.2 「高齢者」イメージ	10
2.4 まとめ	11
3. 「ものわかり」記述の基礎	13
3.1 共通基盤と共同行為	13
3.1.1 共通基盤	13
3.1.2 二種の共通基盤	14
3.1.3 共通基盤の形成	15
3.1.4 共同行為の階層	15
3.2 Clark による基盤化理論	16
3.2.1 基盤化	16
3.2.2 貢献	18
3.2.3 貢献のパターン	18
3.3 Traum による基盤化理論	20
3.3.1 Clark による基盤化理論の問題点	20
3.3.2 基盤化アクト	20

3.3.3	基盤化の遷移ネットワーク	21
3.4	本研究の方法論としての基盤化理論	24
3.4.1	Traum の基盤化モデルの適用	24
3.4.2	本研究への適用に関する問題点	25
4.	予備観察	27
4.1	収録	27
4.1.1	高年齢層群のデータ収集	27
4.1.2	低年齢層群のデータ収集	29
4.1.3	データ準備	30
4.2	分析方法	30
4.2.1	基盤化アクト付与	30
4.3	結果	31
4.3.1	対話の概要	31
4.3.2	「承認」に関する特徴	33
4.3.3	繰り返しに関する特徴	33
4.3.4	沈黙に関する特徴	34
4.3.5	その他の特徴	34
4.4	考察	34
5.	観察	36
5.1	収録	36
5.1.1	高年齢層群のデータ収集	36
5.1.2	低年齢層群のデータ収集	38
5.1.3	データ準備	40
5.1.4	データ表記	42
5.2	分析方法	43
5.2.1	言語表現に関する基盤化アクト付与	43
5.2.2	非言語表現に関する基盤化アクト付与	44
5.2.3	付与した基盤化アクトの信頼性検証	45
5.3	結果	45
5.3.1	対話の概要	45

5.3.2 「承認」を中心とした基盤化アクト分析	49
5.3.2.1 「承認」 + 「始動」出現数の比較.....	49
5.3.2.2 「承認」 + 「始動」以外の「承認」の分析.....	52
5.3.2.3 基盤化終了地点に特徴のあった DU.....	56
5.3.2.4 「承認」後に「承認要求」行う.....	57
5.3.2.5 「承認」後に「承認」を行う.....	59
5.3.3 共同補完について	60
5.3.4 繰り返し応答について	62
6. 考察	64
6.1 基盤化の単位	64
6.2 発話番交換.....	66
6.3 「承認」の種類.....	71
6.4 基盤化終了の共通理解.....	71
6.5 対話に対する協力姿勢.....	72
6.6 対話の2つの型.....	72
6.7 対話の「わかりやすさ」とは.....	73
7. おわりに.....	75
参考文献.....	79
付録.....	81

目 次

図 3.1 (最も単純な基盤化遷移ネットワーク図)	22
図 4.1 (予備観察における高年齢層群のデータ収録状況)	28
図 4.2 (予備観察における低年齢層群のデータ収録状況)	29
図 5.1 (高年齢層群のデータ収録状況)	37
図 5.2 (低年齢層群のデータ収録状況)	39
図 5.3 (音声データの波形表示サンプル)	41
図 5.4 (基盤化アクト数内訳比較)	47
図 5.5 (「承認」数の内訳比較)	55

表 目 次

表 3.1 (基盤化アクト状態遷移表)	23
表 4.1 (UU 数・DU 数)	32
表 4.2 (「承認」の内訳)	32
表 4.3 (繰り返しの数)	32
表 4.4 (沈黙の数と秒数・フィラーの数)	33
表 5.1 (両群の収録条件まとめ)	40
表 5.2 (高年齢層群：DU 数・UU 数)	46
表 5.3 (低年齢層群：DU 数・UU 数)	46
表 5.4 (高年齢層群：基盤化アクト数内訳)	46
表 5.5 (低年齢層群：基盤化アクト数内訳)	47
表 5.6 (高年齢層群：DU の基盤化状況)	48
表 5.7 (低年齢層群：DU の基盤化状況)	48
表 5.8 (高年齢層群：「承認」・「承認」 + 「始動」の数と割合)	51
表 5.9 (低年齢層群：「承認」・「承認」 + 「始動」の数と割合)	51
表 5.10 (「承認」 + 「始動」 / 「承認」の平均と標準偏差)	52
表 5.11 (高年齢層群：「承認」数の内訳)	55
表 5.12 (低年齢層群：「承認」数の内訳)	55
表 5.13 (「承認」の内訳)	56
表 5.14 (「承認」の内訳：残差の一覧表)	56
表 5.15 (高年齢層群：基盤化終了地点に特徴のあった DU 数)	56
表 5.16 (低年齢層群：基盤化終了地点に特徴のあった DU 数)	57
表 5.17 (高年齢層群：その他の特徴)	60
表 5.18 (低年齢層群：その他の特徴)	60
表 6.1 (高年齢層群：「承認」の分布)	64
表 6.2 (低年齢層群：「承認」の分布)	65
表 6.3 (高年齢層群の平均と Y1 の比較：「承認」と共同補完・繰り返し応答のみ)	73

1. はじめに

私達はさまざまな方法で互いに意思を伝達し合う。中でもことばを使いながらの意思伝達には重要な役割が与えられてきた。しかし、いつも十分に機能するわけではない。ことばの行き違いによって誤解された、というような経験は誰しものが味わったことがある。当人は誤解のないように、わかりやすく話しているつもりなのに、わかってもらえない、というようなことも生じる。「わかりやすく」話すとはどういうことを指しているのだろうか。話し手が相手に合わせたことばを使うことなのだろうか。ゆっくり話すことなのだろうか。聞き手に責任はないのだろうか。

対話は、話し手と聞き手が共同して進めていくものである。自分がわかったことを相手に伝え、相手がそれを理解し、それをまた自分がわかる。そのような過程の繰り返しで進んでいく。

互いに互いの理解を伝えあう仕方には、いくつかルールがある。順番に話す。聞かれたら答える。間が空かないようにつなぎのことばをしゃべる。これらは対話を支える状況に関するルールである。これらのルールに則る限り、たいがいの対話はうまく行く。しかし、うまくいかないと感じられる場合もある。その一つに高齢者との対話がある。高齢者と話しをするとき、まだ高齢に達してない者は、ときに高齢者を「ものわかり」が悪いとしてしまう。本研究は、この高齢者の「ものわかり」の悪さに焦点をあてる。

1.1 研究の動機

われわれは生涯を通じてさまざまなことを学習するが、年齢とともにだんだん学習が困難になって行く（「ものわかり」が悪くなって行く）と言われている。

21 世紀は知識の時代であると言われているが、高齢者の時代でもある。平成 12 年度厚生白書によると、2030 年には 65 歳以上の高齢者が全人口の約 28%を占めると予測されている。日本における高齢化の特徴は、高齢化の速さが他に類をみない

ということである。現在のところ、目や耳、脳の衰え、運動能力の低下など身体的な特性について、使いやすい建物や自動販売機のような日常的に使用するものについて、介護保険のような政策や高齢者の労働について、高齢者の社会的な役割についてなど、多くの研究がなされてきた。しかし認知的特性に関しては、知覚、記憶容量、認知処理速度などの研究はあるが、対話方略についての具体的なデータはない。生涯学習が重要な課題であるという認識はあるが、それを支える対話過程の変化について十分な研究がなされているとは言えない。

誰を高齢者と呼ぶのか、について考えてみると、体力的な衰えが明確になるのが80歳前後である、ということにははっきりしてきている(直井・堀, 1996)。誰もが年齢を経るにしたがって、記憶力や運動能力の低下を実感していることから考えても、高齢になって一足飛びに変化が起こるのではなく、身体的・心理的な変化がゆるやかに起こっていることは明らかである。したがって高齢者に関する研究を行うということは、徐々に起こっているであろうさまざまな変化の最終部分を見ることになり、高齢化に伴う変化の過程を理解するのに役立つ。

高齢になっても言語能力は衰えないと言われているが、そうであるならば対話における「ものわかり」の悪さは、言語能力以外のところに原因を求めなければならない。そこで本研究では、高齢者の「ものわかり」の悪さについて、対話の構造面から分析する。「ものわかり」が悪いという高齢者に対する印象は、対話における知識の共有過程に、高齢者特有のものがあるのではないか、という仮説を実証的に検証する。

本研究の特色は、(1) 高齢者対話のグラウンディング(基盤化)過程の特徴を明らかにすること、(2) 今まで成人について研究されてきた基盤化過程の分析を高齢者に適用すること、にある。

1.2 研究の目的

高齢者との対話について振り返ってみると、「話が通じない」「のみ込みが悪い」などという感じを持つようなことがある。このような直感的な把握をもう少し考えてみると、

- ・ 何度も同じことをきかれる
- ・ いったん「わかった」と言ったのに、また同じことを言われてしまう
- ・ 理解のスピードが自分と比べて著しく遅いような気がする
- ・ 自分の考えに固執して、他人の言うことに耳を傾けない
- ・ 新しいものが入っていかない
- ・ 特定の部門でものを忘れがひどい
- ・ 達成感がないのか、同じことを繰り返す
- ・ 知らないものを排除しようとする

といった現象を思い浮かべることができる。しかしこのように列挙してみても「ものわかり」の悪さの実体は見えてこない。「ものわかり」が悪いとは、具体的にはどのようなことを指すのであろうか。

対話とは、複数の人が互いに調整を行いながら、ことばを使って行う共同行為である (Clark, 1996)。Clark によると、対話を行うためには、自分がその対話の一部を担っているという意図を持つと同時に、相手もその対話の一部を担っていることを自分が知っている必要がある。対話が2人で行われるとするならば、おのおのについてその認識が成り立っていなければならない。共同で対話を成立させているという信念が必要なのである。対話というのは、このように相互信念または共通基盤を基礎としている。そしてこの共通基盤がことばの使用によって蓄積されていき、蓄積された共通基盤を利用してさらに対話が進んでいく、という基盤化理論を Clark は提出している。

対話における「ものわかり」とは、対話を進行させながら、相手との間になんらかの共通基盤を培う過程そのものである。対話は、共通基盤の蓄積なしには行えない。対話をこのような共通基盤の基盤化過程と見るとき、対話の「ものわかり」とは、対

話そのものに取り立てて困難を感じない場合、つまり基盤化の過程が滞りなく行われている場合をよい、対話者に困難を感じさせる、つまり共通基盤の基盤化がうまく行われていない場合を悪いとするのではないだろうか。

本研究の目的は、基盤化理論の枠組みを使って、「ものわかり(の悪さ)」を記述することにある。この作業を通して、(1)高齡者の対話過程の特徴、(2)高齡者に限らず、対話一般における「わかりやすさ」、について考察を進めることができると考える。

2. 高齢者の「ものわかり」について

高齢者についての研究は、さまざまな分野で活発に行われているが、本研究では高齢者の対話が興味を中心であるため、まず高齢者の言語使用についての先行研究を見る。次に対話を支える諸能力と加齢について、最後に高齢者はどのような自己イメージを持って対話をしているのかを見るために、高齢者の動機づけと「高齢者」イメージについての先行研究を記す。

2.1 高齢者の言語使用

言語に関わる知能については、これまで加齢に伴って低下するものと考えられてきた。これはある時点で、高齢者と若年成人とを比較研究した結果である。しかし、「縦断法」と呼ばれる、一人の人を若いときから高齢に至るまで調査し、その変化を追うという研究が行われるようになって、この考え方が必ずしも正しいわけではないということがわかってきた。東京都老人総合研究所の行った 73 歳からの 83 歳までの 10 年間にわたる追跡調査によると、WAIS 成人知能検査の言語性得点に関して継時的な変化はないことがわかった（厚生白書, 1999）。言語に関する知能は加齢による影響を受けにくい、ということが明らかになった。

喚語困難と言われる、意味ないし概念にもとづいて単語の音韻系形式を検索することができにくくなるという操作も、加齢の影響を受けるとされている（辰巳, 1997）。高齢者が指示代名詞「あれ」を濫用するような現象はおそらく喚語困難と関係があるだろうとされている。またそのため、会話が文脈に依存する度合いが高くなり、話がわかりにくくなる、という指摘もある。「あれ」などの指示代名詞が頻繁に現れるということは、対話を分析することによって容易に見てとれるだろう。また、喚語困難のために話がわかりにくくなるという点に関しても、指示代名詞で指し示されるものやことを特定するのに時間がかかり、時宜を得た返事ができない、などという現象として見えてくるだろう。

若年成人と若年成人、高齢者と高齢者、若年成人と高齢者という組み合わせにおい

て、会話はどのように異なっているのか、という研究が Kemper らによってなされている (Kemper & Vandeputte, 1995)。これによると、若年成人は高齢者と会話を行うとき、ある種の調整を行うことが明らかになった。この研究では、若年成人と若年成人、高齢者と高齢者、若年成人と高齢者がそれぞれペアになり、双方が同じ地図を持ち、片方が他方に道順を説明するという課題を実験として行った。その結果、若年成人が高齢者に説明する場合には、より多く発話をする、より多く指示をする、言い方により多くのバリエーションを持たせる、発話速度をゆるめる、より平易な文を用いる、命題数を減らすなどの調整が見られた。高齢者が説明を受ける側にまわったときは、高齢者が話し手である若年成人の指示を繰り返す、混乱した表現を使う傾向にある、などの特徴が見られた。高齢者が説明をする場合には、漠然としてあいまいな指示をしばしば行う、聞き手の要求を無視することがあるなどの現象が見られた。最終的にできあがった地図の正確さに、年齢による違いはなかった。課題後のアンケートにおいては、高齢者は若年成人と組になったとき、理解と表現において問題があると感じていることがわかった。

この研究は特に「ものわかり」の観点から行われたものではないが、同年代同士の会話と異年代同士の会話ではスタイルが異なるという結果から、対話の基盤化過程にも違いがあるだろうと予測できる。また正確さに至る過程にも違いがあるかもしれない。

高齢者に特化した研究ではないが、会話におけるぎこちなさ (disfluency) について年齢・関係・話題・役割・性別の観点から探った研究がある (Bortfeld, Leon, Bloom, Schober, & Brennan, 2001)。これはぎこちなさの指標として、言い直し・繰り返し・フィラーを取り上げ、これらの発生度合いを調べたものである。この研究では、片方に与えられた 12 枚のカードと同じ並びを他方が作り上げるといった課題を行った。48 ペアのうち 16 ペアが中央値 67 歳の高齢者であった。高齢者ペアにおける関係の変数は、42 年程度の結婚期間があるものとその時に知り合ったもの、話題の変数は、子どもの絵のカードとタングラム、役割の変数は、片方が指示し、他方がそれに従うというものであった。その結果、高齢者はフィラーを多用することがわかった。筆者らはこの結果が、高齢者はことばを取り扱うのにより大きな困難があるということと矛盾しないとしている。また高齢者が言い直したり、繰り返したりする割合は他の年齢よりも高いことがわかった。

言い直し・繰り返し・フィラーの多さは、スムーズな対話の妨げになる可能性がある。対話がスムーズに展開されないと、「ものわかり」が悪いという印象が持たれるかもしれない。この研究で指摘されたぎこちなさの変数は「ものわかり」とどのような関係があるのだろうか。

2.2 対話を支える諸能力と加齢

以下に、対話と関連の深い能力として、高齢者の記憶・聴覚・知能・感情表出についての研究をまとめる。

2.2.1 記憶

記憶は単一の機能ではなく、複数の機能が同時に、または時系列的に働く一連の過程である。したがってそのおのおの部分について別個に検討することが必要となる。記憶は、短期記憶と長期記憶という2つの過程からなっていると考えられている。感覚器を通じて入ってくる外部刺激のうち、注意の向けられたものは、短期記憶にとりこまれ、銘記しやすいように符号化される。情報を頭の中にとどめておくためにリハーサルを繰り返すと、それは短期記憶から長期記憶へと転送される。高齢者の記憶について言われている「もの忘れ」という現象は、この長期記憶に蓄えられた中味に関するものであると言われている（宇野, 1997）。

加齢による記憶機能の衰退を高齢者は環境を使って補強しているのではないかという観点からなされた研究がある（漁田・漁田, 1997）。高齢者に記憶課題を与え記憶させ、異なる場所で想起させることによって環境の影響をさぐろうとしたものである。その結果、高齢者には環境的文脈依存記憶というものがあるということが示唆された。

作動記憶とは、一瞬一瞬に行われる情報の処理とその処理の結果をきわめて短時間貯蔵する働きのことである。作動記憶には容量と持続時間の制約があり、加齢にともなって低下することが知られている。暗算、思考、会話、読書など多くの行為に作動記憶が必要とされているため、「ものわかり」の悪さとも大きな関わりがあると考え

られる。

記憶能力の自己評価や記憶に関する知識、すなわち記憶についての記憶はメタ記憶と呼ばれる。この種類の記憶に関する研究として、河野は、記憶前テストにおいて自分の記憶がよいと思っている高齢者ほど、実際の記憶成績は悪く、反対に自分の記憶成績が悪いと思っている高齢者ほど、記憶成績はよいことを報告している（河野, 1999）。

2.2.2 聴覚

知覚の研究は、加齢にともなって五感の機能はどのように変化するか、という観点からなされているが、対話において関連が深いのは、聴覚の変化である。聴力の加齢による変化について見てみると、40歳代から高音域（2000Hz以上）の聴力低下が始まり、60歳代を過ぎると低下はいっそう顕著になる。それと同時に低音域（500Hzを中心とした領域）での聴力低下も見られるようになる（横内, 1964）。500Hz～2000Hz領域での聴力低下が起こってようやく自分の聞こえの悪さが自覚できるようになると言われているため、実際の聴力低下と聴力低下への自覚にはズレが生じる可能性がある。ある程度の聴力低下は、相手の発話への集中力を高めることによって補いがつく。このような現象が、「年寄りには自分の悪口だけはよく聞こえる」というような言い方で表現される現象である。この場合は、自分の名前への集中力を高めているので、聞き取ることができるのである。

聴力低下そのものや聴力低下への自覚がないことは、「繰り返し聞く」などという「ものわかり」の悪さとして現れる可能性がある。また何度も繰り返し聞き返すことは対話のスムーズな展開を妨げることから、それを避けるため「わかったふりをする（その後、わかっていないことが判明する）」ことも考えられる。

2.2.3 知能

加齢がすべての方向に対しマイナスに働くのではなく、伸びていく能力もあるとの観点から、知力を質的に異なる2つのものに分類する研究がある（Horn & Cattell, 1966）。一つは、加齢の影響を大きく受ける知力で、Hornらはこれを流動性知力と呼んだ。

初めてぶつかる課題に対し、過去の経験によらず、課題の内容の中に問題の解決のしかたを見出して対処する能力であり、情報処理の速さや正確さを表わす。もう一つは、生涯を通しての経験の積み重ねにより獲得される能力であり、これを結晶性知力と呼んだ。結晶性知力は日常生活の中で蓄積されていく。この中には言語的理解力、一般常識などが含まれるとされる。

対話における共通基盤の形成には複雑な調整過程が必要であるが、この調整がその場その場に応じてなされることと、流動性知性との間には関連が考えられる。調整にはある一定の速さと正確さが求められるので、この点において、流動性知性の低下は「ものわかり」の悪さの現象として見えてくる可能性がある。一方、調整は経験に基づく営みであるので、結晶的知力と呼ばれる側面がプラスに働く可能性もある。

2.2.4 感情表出

笑いの表出について調べた研究によると、75歳以上の後期高齢者は笑いの持続時間が短く、強度においても小さい傾向があると指摘された（宇良・矢富, 1997）。高齢者の表情はしわなどによって読み取りにくくなっていると言われていたが、表出そのものも少なくなっていると考えられる。また、いったん表出された笑いの表情が消失されにくく保持される傾向も見られたとしている。この研究はビデオ刺激による笑いの表出度（頻度・持続時間・強度）を調べたものであるが、対話においても笑いの表情は重要な役割を果たすものであるから、対話にもなんらかの影響を及ぼすものと考えられる。

高齢者がどのように他者の感情を理解するのかを調べた研究もある（福田・伊藤・佐藤, 2000）。他者の感情を理解する場合において、自分の考え方の「枠」（認知フレーム）に当てはめて回答する傾向、また一度形成した印象が持続して、他者感情の理解が歪む傾向が見られたとしている。このことは、「年寄りの話しは繰り返しが多い」という印象の元となっている可能性がある。

2.3 高齢者の自己イメージ

高齢者はどのような自己イメージを持ちながら対話をしているのか、動機づけと「高齢者」イメージについての研究をまとめる。

2.3.1 動機づけ

65歳以上の高齢者を対象にした記銘力テストによる学習効果の研究によると、高齢者は身近な物や事象など興味・関心の高いものほど学習効果があがっている（長嶋, 1970）。つまり高齢者は、現実離れした無意味な事柄に対するより、現実的で意味のあるものに対して、より高い動機づけを示す。その結果、学習効果があがるのである。また、高齢者の学習では、問題解決を志向することが大きな特徴として挙げられている。いつ役に立つかわからない漠然としたテーマより、日常生活の中で抱えている問題をいかにしたら解決できるかということにより大きな関心を寄せているのである（稲生・佐々木ら, 1992）。

これらの研究による指摘は、対話におけるトピックの違いによる「ものわかり」に関連すると考えられる。

2.3.2 「高齢者」イメージ

高齢者に対するイメージには肯定的なものと否定的なものがある。肯定的なものとしては「人生経験が豊富」「思慮深い」「魅力がある」「穏やか」などが挙げられる。否定的なものとしては「さびしい」「意欲がない」「不健康」「弱い」「頑固」「依存的」などが挙げられる。「ものわかり」が悪いというのも否定的なイメージに含まれるだろう。このようなイメージ（ステレオタイプ）とコミュニケーションの研究として、Ryan(1992)らの研究が挙げられる。若年成人と高齢者に、25歳と75歳の人のコミュニケーション能力を判定させたもので、75歳の人物の方が、同じことを何度も繰り返させる、話の筋を見失いがち、などの否定的なイメージで見られていることがわかった。肯定的なイメージとしては、高齢者の方がより多くの語彙を理解する、というも

のであった。これは若年成人、高齢者ともに持っているイメージである。また、高齢者の否定的なステレオタイプに基づいて、若年成人は高齢者に対して、保護的なコミュニケーションを取る傾向にある、ということも見出されている（Ryan, 1995）。

高齢者には「用心深い」「慎重」といったステレオタイプが与えられている。これは高齢者は若年成人に比べて新しい事象に慎重であり、挑戦しようとしなない、という否定的なイメージにつながるものであるが、高齢者の意思決定の問題に関する研究で、増田らは高齢者が特に確実な選択を好むわけではないことを明らかにしている（増田・坂上・広田, 1997）。

ステレオタイプに基づく思考は排除することができないが、そのことが高齢者とのコミュニケーションにどちらかという否定的な影響を与えていることは間違いがない。「ものわかり」の悪さといった否定的なイメージが、高齢者との対話の中に、果たしてどのような形で見えてくるのか、高齢者のイメージに関する研究は、本研究のような実証的な取り組みを後押しするものであると思われる。

2.4 まとめ

「ものわかり（の悪さ）」は高齢者のさまざまな能力・要素が互いに絡み合った現象であることがわかった。以上の調査より、高齢者対話にどのような特徴が現れるかをまとめると以下ようになる。

言語使用に関する研究から予測されること

- ・ 時宜を得た返事ができにくくなる。
- ・ 対話の正確さに至る過程において差が見える。
- ・ 言い直し・繰り返し・フィラーなどのため対話がスムーズに展開されない。

諸能力に関する研究から予測されること

- ・ 慣れていない環境（あるいは拡大解釈をして、慣れていない人と）ではうまく対話ができない。
- ・ 記憶力が低下しているのに気づかないで対話を進める。

- ・ 何度も聞き返すことによって対話のスムーズな展開を妨げるという現象を回避するため、わかったふりをする。
- ・ 対話におけるその場その場の調整がうまくできない。あるいは逆に、経験に基づいての調整がうまくできる。
- ・ 対話進行の非言語的側面に影響がある。
- ・ 自分自身の「枠」に固執するため、繰り返しが多くなる。

自己イメージに関する研究から予測されること

- ・ 日常生活に関連の深いトピックになら興味を示すが、関連の深くないトピックには関与の度合いが低くなるなど、トピックによって対話パターンに違いが出る。
- ・ 保護的なコミュニケーションに適應した反応を示す(ただしこれは異世代同士の会話の場合)。
- ・ 否定的な老人イメージを内面化している場合、それにあわせたコミュニケーションスタイルを取る。

3. 「ものわかり」記述の基礎

私達は何かを行うためにことばを使用する。あらかじめ決まったことばを述べることもあるし、その場その場で考えながら話すこともある。電話ではもっぱらことばに頼るが、スポーツをしている最中には最低限のことばしか必要としない。私達はさまざまな活動においてことばを使い、活動によってことばの使用頻度に多寡があるが、共同で何かを行うためにことばを使用している。Clark によれば、ことばを使うことは共同行為の一つである。

何かを共同で行うためには、その活動に関わっている人全員が、その都度その都度、そのときに行っていることをわかりながらことを進めていく必要がある。今行われている生きた活動は、たった今行った部分を取り消すことができないし、まったく同じように繰り返すこともできないので、その時その時にわかり合うことが大切になる。Clark は、その時々により共有される知識を確認する仕方を基盤化と呼び、貢献モデルを提案した。また Traum (1994) は Clark の貢献モデルの問題点を指摘し、対話を動的に予測するモデルとして基盤化の有限状態モデルを提案した。

本研究では基盤化理論が対話における知識共有過程を記述する点に着目し、これを「ものわかり(の悪さ)」の要因を明らかにするために用いる。以下に基盤化理論の概要を説明するが、まず基盤化理論の基礎となる共通基盤と共同行為を Clark によって述べ、次に Clark の基盤化理論、最後に Traum の基盤化理論について述べる。

3.1 共通基盤と共同行為

3.1.1 共通基盤

Clark によると、対話とは、「複数の人が互いに調整を行いながら、ことばを使って行う共同行為」の一つである。そして、共同行為をなすためには、共通基盤が必須となる。

私達は、自分自身を取り巻くさまざまな情報を基礎として物事を行う。独りで行う

行為の状況について考えるとは、自分を取り巻く情報とその情報に対する自分の気づきについて考えることである。対話のような共同行為を行う場合には、もう少し複雑になる。私達は私達自身を取り巻くさまざまな情報と、その情報に対する自分の気づき、そして相手の気づきについて考えることになる。これは一種の共通基盤を記したもので、Clark は次のように定義している。

p は共同体 C の成員にとって以下が成り立つときに共通基盤となる。

1. C の成員は基礎 b が成立するという情報を持つ
2. b は C の成員に対し、 C の成員は b が成立するという情報を示す
3. b は C の成員に対し、 p であることを示す

この場合共通基盤 p は、基礎 b を置くことによって成り立つことになる。基礎 b は共同体 C の全員に共有され、基礎 b が共有されることによって共通基盤 p が共有されることになる。

3.1.2 二種の共通基盤

以上を基本定義として、Clark は共通基盤を次の 2 種類に分けている。一つは共同体的な共通基盤である。ある共同体の成員であれば知っていると思われるようなことについて想定している。例えば、日本人であれば、日本語を理解し、日本の制度について知っている。薬学の教育を受けた人なら、薬について詳しい。ピアノが引ける人は音符が読める。というような想定である。このような国籍、教育、職業、趣味、言語などに関する共通基盤が共同体的な共通基盤である。この共通基盤に関しては、どのようにして慣習や規則(基礎 b にあたる)が共同体 C に対して明らかでありうるのか、という点で疑問が出されている(西阪, 1997)。

これは例えば当事者が 2 人いる場合、その 2 人と指示対象が同時にそこにあるということが明らかであるのと同じように、当事者と規則や慣習の同時存在は明らかであるのか、というものである。異世代間の対話と関連が深いと思われる。

もう一つは、私的な共通基盤であり、これは私的な経験に基づいている。私的な経験とは、一緒に博物館に行くとか、待ち合わせの約束をすとか、そのような経験の

ことである。私的な経験が共通基盤となるのは、例えば一緒に博物館に行って、一緒に展示物を見ている間に片方が転んでしまうなどの変化が起きた場合である。するとそれが2人の間で顕現的になり、そのため私的な共通基盤が形成されることになる。

3.1.3 共通基盤の形成

Clark は、共同体的な共通基盤を作り出すために、人は状況証拠やその人の話したことなどを手がかりにしている。状況証拠とは、外見、使用することば、そのときの状態などで、共通基盤形成に非常に有用であるとしている。

また共通基盤は層をなしており、古い基盤の上に新しい基盤が重ねられていくとしている。

以上が共同行為の基礎となる共通基盤である。

3.1.4 共同行為の階層

Clark は共同行為を階層に分けられるとしているが、対話という共同行為について見てみると次の4つの階層に分けることができる。

階層 話し手 A の行為 聞き手 B の行為

- 4 A は相互行為 w を B に提案する B は A の提案である w を考慮する
- 3 A は B に対し命題 p を意味する B は A からの命題 p を認める
- 2 A は B に対し信号 s を提示する B は A からの信号 s を同定する
- 1 A は B に対し行動 t を実行する B は A の行動 t に注目する

上の層から順に見ていくと、第4層は、最も上位の階層で、Clark はこの階層の共同行為のことを共同プロジェクトと呼んでいる。A によって提案されたプロジェクトは B によって取上げられない限り完成しない。共同プロジェクトには共同の目標があり、共同目的は次の4つを満たさなければならない。すなわち、A、B の2人によって共同目標 r が同定されること、A、B は r を満たすにあたってそれを行う能力があること。A、B に r を満たすにあたってそれを行う意思があること。A、B が以上のこ

とを共通基盤だと信じていること、である。

A の提案に対する答えは A にとって好ましい順に、完全な承諾、プロジェクトの交代、プロジェクトの辞退、プロジェクトからの撤退となり、2 人が行おうとしていることがどの程度成功しているのかがここからわかる。

第 3 層は、A が命題 p という信号を出し、B がそれを認める層である。ことばの使用で言えば、あるまとまった意味の発話を行い、その意味するところを理解する、という行為を指す。

第 2 層は、A が信号を提示し、B がそれを同定するという層である。言いよどみ言いかけて停止し、沈黙や引き伸ばしやフィラーなどが続き、継続・反復・代用などで終わる一連の流れ の特徴はこの層に分類される。

第 1 層は、A がある行為を実行し、B がその行為に注目するという層である。ことばの使用について言えば、A が話すという行為をなし、B がそれに注目するということになる。注意には、同時に一つのものにしか注目できない、数ミリ秒単位で注意を移すことができる、容易に他のことに占有される、という特徴がある。

これらの階層は、上へ向かっては上方への完了が、下へ向かっては下方への証拠という特性がある。基盤化が上方層で完了すれば、下方層に対しては基盤化が完了したという証拠がなくても、上方層で完了したという証拠でこと足りるという特性である。

「ものわかり」は共同行為の第 3 層以上に関わる現象である。注目だけでも、信号を同定するだけでもわかっているとは言えない。

3.2 Clark による基盤化理論

3.2.1 基盤化

共通基盤を形成する過程を基盤化と呼ぶが、Clark は以下のように定義している。

基盤化とは、あることを現在の目的に対して十分な程度、共通基盤の部分として確立することである。

次の対話においてこのことを考えてみると、

A：今日 ……………
B：うん ……………
A：あ、料理が出たん ……………
B：うん、ご飯が出たつまり……………

A の質問()に対し、B は内容を正しく理解し、そのことが A と B の共通基盤にならなければならない。

この例では、 によって B は、A の質問 を正しく理解したことを示している。さらに によって A は、B が A の発話 を正しく理解したことを確認している。さらに によって B は、A が「B が A の質問を理解したことを示す発話 を理解したこと」を理解したことを示している。

つまり対話には共通基盤が必要であり、またその共通基盤は、対話の進行にともなって蓄積されていく。その蓄積された共通基盤が、また次の発話と理解に利用されるのである。

基盤化は、共同行為が閉じられる点を単位として行われるが、ある点が閉じられたとするには証拠が必要である。Clark は、証拠が十分であるためには次の原則が成り立っていないなければならないとする。

妥当性 : 信頼できかつ解釈可能であること
最小努力 : もっとも小さな努力で行われること
時宜性 : ちょうどよい時間に発せられること

対話はこの閉じられる点に向かう過程の積み重ねであるが、さらに正確にいうとこの過程は、対話が成功裏のうちに理解される点への収束と見ることができる。Clark はこれを貢献と呼んでいる。

3.2.2 貢献

貢献は次の2つの段階からなるとして、対話における参加者の共通基盤形成の過程をモデル化した。

提示：AはBが理解するところの信号 s を提示する。Aは、BがAに対し証拠 e を与えるならば、AはBがAの意味するところを理解したと信じてよい、と想定する。

受理：Bは、BがAに対しAの意味するところを理解したと信じる証拠 e' を与えることによってAの信号 s を受理する。Bは、いったんAが e' を取り入れるなら、AもまたBが理解したことを信じるだろうと想定する。

対話が成功裏のうちに理解されたことを知るためには、積極的な証拠が必要である。提示側は、自分の提示に対して受理されたという明白な証拠を必要としているという点で、従来のモデルとは異なり、Clarkはその積極的な証拠として以下の4つを主な種類として挙げている。

主張：うなずきや「はい」「いいえ」など。

前提：提案を取上げる。関連する次の発話番を開始する。

展示：理解したことを示すある種の答えなど。

例示：言い換えや、繰り返し、表情の動きを見せる。

つまり貢献とは、対話における成功した共通基盤形成の過程のことであり、成功を知るためには積極的な証拠が必要なのである。

3.2.3 貢献のパターン

貢献にはいくつかのパターンが見られるが、Clarkは次のようなものをあげている。

- ・ 完結した貢献：Aは、BがAの貢献と同じ層で次の貢献を始めるというよ

うな理解を前提することによって受理するところの信号を提示する。

- ・ 継続する貢献：A は「ん」とか「はぁ」のような合図やうなずきまたは微笑みというバックグラウンドでなされる承認で理解を主張することによって受理するところの信号を提示する。
- ・ ユニゾン：声を合わせるようにして同じことを言う
- ・ 分割提示：貢献を分割し、あるまとまりをつけて提示する
- ・ 共同補完：協力して完成させる
- ・ 先取り：聞き手が先取りとして言う
- ・ フェードアウト：話し手が途中で言い止める
- ・ 途中まで理解を示す
- ・ 発話途中で質問をする

貢献が失敗したときのパターンとしては次の4つを挙げている。

- ・ 誰も聞いている人がいなかったという意味で失敗した発話（第1層での失敗）
- ・ 互いに通じる言語が見出せなかったという意味で失敗した発話（第2層での失敗）
- ・ 指し示す対象を聞き手が知らなかったという意味で失敗した発話（第3層での失敗）
- ・ 聞き手が知らなかったことにより共同作業が成立しなかったという意味で失敗した発話（第4層での失敗）

Clark は、このような貢献のパターンは、別の貢献の中に埋め込まれることがあるとしている。つまり貢献には階層があるとしているのである。

貢献のパターンや貢献の失敗を高齢者の対話にあてはめて考えてみると、例えば、聴覚機能が低下したため、「先取りして言う」や「協力して完成させる」というパターンの出現頻度が低くなるというようなことが考えられる。あるいは、出現頻度が低くなるだけでなく、貢献の失敗として観察されるかもしれない。

3.3 Traum による基盤化理論

3.3.1 Clark による基盤化理論の問題点

以上、Clark の基盤化モデル - 貢献モデル - について見てきたが、Traum によるとこのモデルには次のような問題点がある。

- ・ 基盤化の過程が当事者の信念を反映していない。事後的に振り返って対話を見たものとなっている。
 - ・ 対話の各時点において貢献の基盤化がどの段階にあるかが明示されていない。
- 以上を踏まえて、次に Traum の基盤化の考え方を見ていく。

3.3.2 基盤化アクト

Clark が貢献という単位を設定し、提示・受理という 2 つのフェーズによって基盤化過程を表現しようとしたのに対し、Traum は談話ユニット (Discourse Unit . 以下 DU) という単位を設け、7 つの基盤化アクトと当事者のその時点での状態とによって基盤化過程を表現しようとしている。

DU とは一つの発話が提示され、その発話が当事者間で理解され、そのことが当事者間の共通基盤となるまでの範囲を指している。DU は一連の基盤化アクトによって構成され、基盤化アクトの基本単位は発話ユニット (Utterance Unit . 以下 UU) である。UU はイントネーションやポーズによって区切られた発話の単位で、基盤化アクトはこの UU に対して付与されることになる。以下に基盤化アクトの一覧を示す。

始動 (init) : DU を構成する最初の発話。始動は貢献モデルの第 4 層の提示に対応する。

継続 (cont) : 同じ話し手によってなされるすぐ前の行為の継続。継続は切り離された UU であるが、統語的概念的にはその同じ行為の部分である。

承認 (ack) : すぐ前の発話の理解を主張・示威する承認。

- ・ その発話の全部または一部の繰り返しまたは言い換え
- ・ 理解を示す明示的な信号
- ・ 理解を示す暗示的な信号。次の DU を始める、質問に答えるなど。

修理 (repair): DU の内容の変更。すぐ前に発話の訂正、または話し手の意図の解釈を変えることになる発話。修理によって、発話の内容または現 DU の発話行為アクトの型を変えることができる (付加疑問文によって通知から質問に変わるなど)。

修理要求 (reqRepair): 他者による修正の要求。修理または承認との違いは、イントネーションの違いだけによることが多い。これによって聞き手に修理、明示的な拒否、延期 (引き続き要求する) などの談話義務が生じる。

承認要求 (reqAck): 他方の主体にすぐ前の発話に対して承認をさせようとする試み。修理要求とほぼ同じ談話義務が生じる。

キャンセル (cancel): 基盤化されないとして現 DU が閉じること。現 DU の放棄。

基本的に DU は、「始動」と呼ばれる UU によって新しい内容が提示され、「承認」と呼ばれる UU によって基盤化が完了する。「始動」は Clark の言う「提示」にあたり、「承認」は理解の証拠を示すことに対応する。「修理」と「修理要求」は、Clark のモデルにおいては埋め込まれた貢献に相当するものである。Traum はこれらの基盤化アクトを「始動」「承認」などと同列におき、埋め込まれた基盤化アクトというものを想定しない。

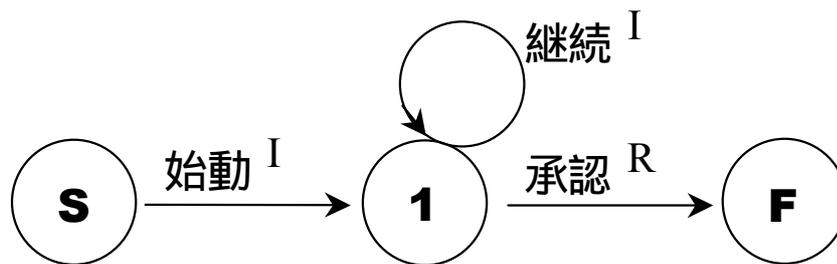
3.3.3 基盤化の遷移ネットワーク

Traum は、Clark の貢献モデルのいちばん大きな問題点として、このモデルでは基盤化のどの時点にいるのかが明確でない、ことを挙げている。つまり状態がはっきりしない、ということである。この点に着目し、当事者が DU のどの状態にいるのかをはっきりと示すものが基盤化の遷移ネットワークである。

DU は「始動」で始まり、「承認」で終わるので、最初の状態を「S」、基盤化された状態を「F」とすると、「S」から「F」への最も簡単な遷移ネットワーク図は、次のよ

うに表わされる。「始動」「承認」などは基盤化アクトを示し、その右肩についている「I」はDUの始動者、「R」は応答者を表わす。

図 3.1 (最も単純な基盤化遷移ネットワーク図)



この例では、DUの最初の状態「S」において始動者Iが「始動」という基盤化アクトを行うと、そのDUは状態「1」に移る。始動者Iが応答者Rの承認なしに発話を続けた場合、その基盤化アクトはIによる「継続」となるが、状態は変化しない。状態「1」において応答者Rがその発話に対して「承認」を行うと、DUの状態は「F」に移行し、このDUが基盤化されたことになる。

Traum は、TRAINS コーパスの分析に基づき、基盤化の遷移ネットワークは有限状態モデルで十分であるとし、有限状態モデルを提案した。以下がその状態図である。

表 3.1 (基盤化アクト状態遷移表)

次の行為	状態						
	S	1	2	3	4	F	D
始動 ^I	1						
継続 ^I		1			4		
継続 ^R			2	3			
修理 ^I		1	1	1	4	1	
修理 ^R		3	2	3	3	3	
修理要求 ^I			4	4	4	4	
修理要求 ^R		2	2	2	2	2	
承認 ^I				F	1*	F	
承認 ^R		F	F*			F	
承認要求 ^I		1				1	
承認要求 ^R				3		3	
キャンセル ^I		D	D	D	D	D	
キャンセル ^R			1	1		D	

*は修理要求が無視された場合の状態遷移

この表で「始動^I」の列を見てみると、状態「S」のところに「1」が入っている。これは、DUの開始状態「S」において行うことのできる基盤化アクトは始動者Iによる「始動」だけで、この行為を行うと状態は「1」に遷移する、ということを表わしている。

状態の面から見てみると、次のようになる。

状態 S : DU が開始されていない状態。

状態 1 : 応答者による承認が必要とされる状態。始動のすぐ後の状態でもある。

状態 2 : 状態 1 の後で、応答者は修理を要求するかもしれないが、その場合は
 応答者が承認を返す前に始動者による修理が必要。

状態 3 : 応答者は直接修理することもできる。この場合、始動者はこの修理に
 対する承認を必要とする。

状態 4 : 始動者は応答者の発話に関して問題があるとし、応答者の修理を要求

するかもしれない。

状態 F : 基盤化し終わった状態。しかしながらさらに承認や修理のようなものが付け加わることもある。

状態 D : DU が放棄された状態。基盤化されないか、基盤化できない状態。

この遷移ネットワークによると、発話者自身が直前に行った発話に対する発話者自身の承認や、他者が始めた発話を継続することは不可能となっている。

状態 3 は応答者が直接、始動者の発話を修理する状態である。このモデルでは、状態 3 において始動者が承認を行うと、つまり応答者の修理を受け入れると、状態 F になる、すなわち基盤化が終わったとしているが、この状態に達した後に応答者が修理または承認要求を行うと、再び状態 3 に遷移する。また状態 F から始動者が修理要求を行うと状態 4 へ移行し、始動者が修理を行うと状態 1 へ移動する。したがって状態 F に到達したからと言って、必ずしも基盤化が終わったとは言えない。問題は残るが本稿の目的の外にあるのでこれ以上深く議論しない。

3.4 本研究の方法論としての基盤化理論

3.4.1 Traum の基盤化モデルの適用

Clark の対話を共同行為とする見方、共通基盤形成過程においては積極的な証拠が必要であるとの見方などは、本研究において重要な基盤となる。しかし「ものわかり」の悪さを貢献モデルにあてはめて考えてみると、高齢者の諸研究から予測される「聞き返し・繰り返し」などは、貢献の中に貢献を含むことになり、複雑な入れ子を形成したり、貢献の範囲が定めにくくなったりする可能性がある。また「わかったふりをする」などは、貢献の失敗パターンとして浮かび上がってくるだろう。しかしこの場合、当事者双方が共に失敗したという共通基盤を持つとは限らない。片方が失敗と感じ、片方が成功と感じていることだろう。どちらの視点に立って、どの地点から貢献を振り返ればよいのかがわからない。したがって高齢者の対話を分析するためには、

視点と範囲を定める必要がある。

Traum は、貢献モデルの問題点として、対話中のある発話がどの貢献に対する受理であるのかを特定するのが難しい、対話の最中にはその発話が貢献の途中なのか、完了なのか、言うことができない、などを挙げたが、それは提示・受理の範囲が定まりにくい、視点が一定しないということである。つまりそれを解決するために提案された Traum の基盤化モデルは、本研究の方法としてもふさわしい。このモデルを用いれば、発話単位として UU を用いるため、発話の単位が定められる。また一つの UU に付与される基盤化アクトは、その発話を行った者の視点だけを表わすため、貢献モデルのように誰の視点から振り返ったらよいかかわからないという問題も解決できる。さらに本研究のように大量のデータを処理する場合にもふさわしいと言える。

Traum の基盤化遷移ネットワークの考えに従えば、片方が発話を行ったら、次に来る発話は機能面からみて決まっていることになる。もし予測されない発話パターンが見出せれば、それを分析することによって「ものわかり」の悪さの要因の手がかりを得ることができるだろう。また年齢層によって基盤化アクトの出現分布の差が見られるかもしれない。

3.4.2 本研究への適用に関する問題点

Traum の基盤化アクトは課題志向型コーパスの分析に基づいて提案されたものである。課題志向型対話においては、課題を達成するために基盤化が必須となる。それに対し、日常会話は特定の課題を持つという課題志向型ではない。非課題志向型対話における基盤化についての研究はなく、基盤化過程は課題志向型対話とは異なった傾向を示す可能性がある。

対話は共同行為の一つなので、相手を必要とする。「始動」は相手を想定して行う発話 - 基盤化アクトである。つまり「始動」という基盤化アクトの機能の中には「承認要求」の機能が含まれることになる。ここで言う「承認」には、相手の発話への同意という高いレベルの機能も、相手に注目するという低い機能も含まれている。つまり「始動」と「承認要求」には一部同じ概念が含まれていることになる。Traum によると、「承認要求」は、「すぐ前の発話に対して、他方の主体に承認をさせようとする試み」である。「承認させようとする試み」という部分については「始動」の定義と

重なる。このような概念の一部重複は実際の対話分析において、どのような影響を与えるものなのだろうか。

キャンセルについて考えてみると、始動者がキャンセルと行う場合と、応答者がキャンセルを行う場合とでは、意味合いが異なってくると考えられる。応答者がキャンセルをする場合と言うのは、暗示的には始動者の「始動」の後に、他方が「承認」機能を持たない「始動」を行うときが考えられる。明示的なものとしては「それはいいから」とか「話したくない」「答えたくない」などと言うことが考えられる。このような場合、前者の暗示的なキャンセルに関しては、その発話(UU)について、「キャンセル」「始動」という2つのアクトを与えるべきだろうか。

うなずきやあいづちのような言語によらない「承認」については、どのように扱うべきであろうか。

以上のような疑問に関しては、実際に会話を分析する中で、よりよい答えを見つけていく必要がある。

4. 予備観察

第2章・第3章の先行研究より、「ものわかり（の悪さ）」は、

- (1)基盤化アクトの出現頻度の差
- (2)基盤化アクトでは考慮されなかったふるまい
- (3)共同行為の各層の特徴

として現れる、予測される。これらを着眼点として予備観察を行った。

4.1 収録

4.1.1 高年齢層群のデータ収集

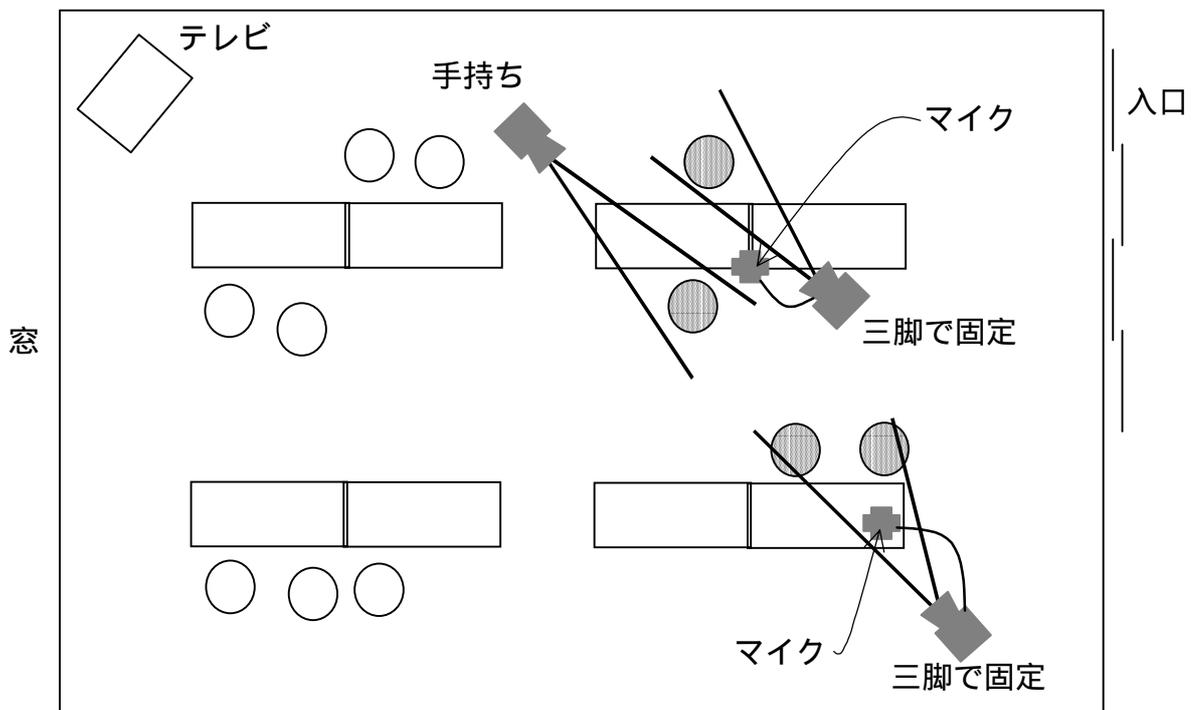
高年齢層群のデータ収集を2001年7月、石川県石川郡鶴来町老人福祉センター「蓬萊荘」にて行った。この施設は鶴来町が設立し運営している高齢者対象の福祉施設で、利用日は地区ごとに決められており、利用者は福祉バスまたは自家用車で施設を訪れる。センターについたら、お風呂、おしゃべり、教室などを楽しみ、3時過ぎに帰宅し、一日の利用を終える。利用者の平均年齢は80歳前後である。女性が多かったので、女性にしばって収録した。今回は「ふだん通りにおしゃべりをしている様子を収録させてもらう」という主旨のみを説明し、その様子を撮らせてもらった。複数でおしゃべりをしている場面もあったが、なるべく2人で話をしている様子をねらった。ペアになった人は同じ地区に住んでおり、普段から同じ日にこの施設を利用しているので、「よく知った仲」であると推定される。

高齢者に関する諸研究から、高齢者は異なる環境においてはふだん通りの対話ができない可能性があるため、それを排除するため、高齢者のよく知っている施設で収録を行った。また、初めて出合った人との対話を設定することも同様の主旨から避けた。

また高齢者の諸研究から、高齢者に興味のないトピックを提供すると、対話への動機づけが弱まるおそれがあるので、よく知っている人同士における、自発的な対話を収録対象とすることにした。

老人福祉施設「蓬莱荘」での収録環境は以下の通りである。

図 4.1 (予備観察における高年齢層群のデータ収録状況)



向かい合わせに座る の組については、ビデオカメラ 2 台を用い一人一人別々に収録した。音声は下側に描かれたビデオカメラに外付けし、2 人のほぼ中央に置いて収録した。上側に描かれたビデオカメラは手持ちで、下側のビデオカメラは三脚に固定した。

2 人が隣り合わせに座わる の組では、三脚に固定したビデオカメラ 1 台を用いた。外付けマイクをそのビデオカメラに接続し、2 人の前に置いた。

どちらの場合も外付けマイクで音声を明瞭に拾う工夫をしたが、同じ部屋には他の人もおり、テレビもついているので、かなりにぎやかで、クリアな音声は拾えなかった。なお図中に示した は収録対象以外の人を表わすが、そのときの雰囲気表現しているのであって、正確な人数を表わしているのではない。

収録時、 の 2 人は、長方形に切られた紙を折り、折った紙を組み立てて人形を作る作業を片方が行っていた。この人はすでにたくさん折った紙を持ってきており、

それを使って組み立てを行っていた。他方は、片方の持ってきていたまだ折っていない紙を対話途中から折り始めた。

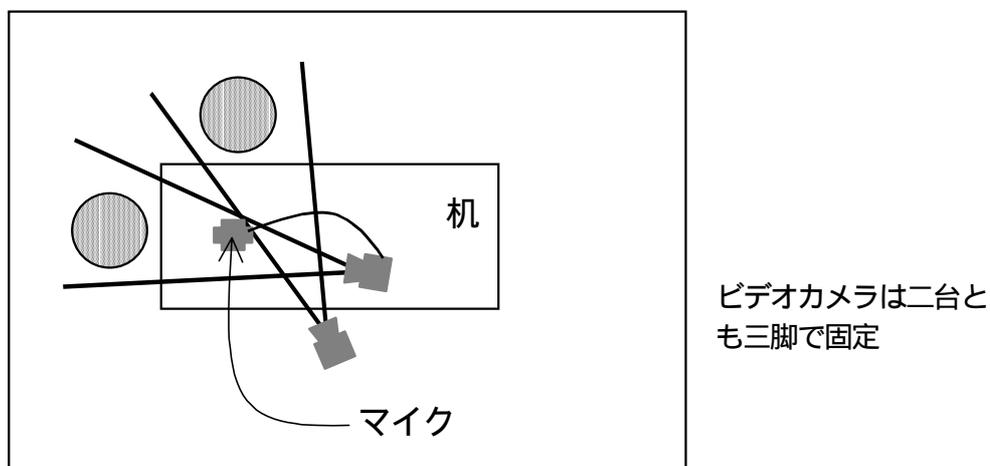
の2人の目の前にはお茶とお菓子があり、片方はときどきお菓子を食べ、お茶を飲んでいった。両者は薬の袋を前にしており、ときおり手にとることがあった。

4.1.2 低年齢層群のデータ収集

対照群として、20歳代から30歳代の成人についても、2002年7月に、普段通りにおしゃべりをしてもらってこれを収録した。高齢者と条件を合わせるため、女性であること、互いによく知っている関係であることを条件にした。1組は学生で、もう1組は学校職員である。研究室の休憩コーナーで収録を行った。

学内での収録環境は以下の通りである。

図 4.2 (予備観察における低年齢層群のデータ収録状況)



ビデオカメラ2台を用い、それぞれの様子をそれぞれのビデオカメラで収録した。机の上に置いたビデオカメラに外付けマイクを接続し、2人の間に置いた。2組ともほぼ同じ配置で収録を行った。

1組は2人の前にそれぞれコーヒーがあり、それを飲みながら対話を進めていた。他の組もそれぞれがコーヒーとお菓子を飲食しながら対話を行った。こちらの2人の

前には『通販生活』というカタログ雑誌があり、それを見ながら、そこに出てくるものをトピックとして対話が進んでいた。

4.1.3 データ準備

高年齢層群は、2人で話している任意の部分を分析対象にした。多数の人がいる大部屋での収録となったので、なるべく他の音が入っていない静かな部分を選んだ。低年齢層群については、話し始めてしばらく経った任意の部分とした。収録条件の都合から、書きおこしは、3分から5分程度とした。

書きおこしはビデオテープの音声に基づき、音声部分を、ひらがな・カタカナ・漢字を用いて行った。表現しきれない部分は、その音にもっとも近い文字を用いることにした。長音は「ー」で表現した。この表記方法は発音に忠実なものではないが、読み方が一意に定まる、検索が容易などの利点がある（堀内ら、1999）ことから、これを採用することとした。

発話の区切りはポーズまたはイントネーションによった。収録の条件から正確に何ミリ秒という区切りを用いることはできなかった。高齢者の自然な対話を収録する場合には談話収録室のような環境を用いることができないので、自然なポーズを区切りとした。おおよそ500ミリ秒から1秒以上のポーズについては、その部分を個別に調べた。

4.2 分析方法

4.2.1 基盤化アクト付与

ポーズまたはイントネーションで区切ったUUの一つ一つについて基盤化アクトを付与していった。付与基準はトラウムの基盤化アクトの定義によるが、いくつかの点については以下のように定めた。

音声を伴わないジェスチャなどによる「承認」に関しては、今回はこれにも基盤化アクトを付与した。「ものわかり」は「承認」と深い関係があると予測されるので、より正確にふるまいを見るためである。

すぐ前の自分の発話に対する自分の発話による繰り返しは「修理」と取れないこともないが、内容が変わっていないので「継続」とした。

以下は個別の UU に関するものである。

1 人の人による一続きの発話にはさまるような形で現れた発話で、「承認」の機能が含まれるかどうか定かでないものには「承認？」と付与した（高年齢層群で 2 例）。

「承認」の中にまったく同じことばの繰り返しによるものが高年齢層群に 1 例あったが、この場合は、疑問とも確認ともつかず「始動」とは言いがたいので、「承認？」とした。

一見「承認」に見えるが、何を「承認」しているか明らかでなく、その後続かないものを「キャンセル？」とした（高年齢層群で 2 例）。その他に高年齢層群で 1 例「承認」かどうか明らかでないものがあつたのでそれには「承認？」と付与した。

「承認」または「始動」の機能というより間を持たせるための発話と見られるものについては、「始動？」と付与するか、または欄外に「フィラー」「フィラー？」と註記した。

疑問のイントネーションを持つ UU で「修理要求」とするか「承認」するか、付与に迷うケースがあつた。聞き返しと思われるイントネーションを持つ高年齢層群の 1 例は「修理要求」とした。他は「承認」+「始動」とした。

4.3 結果

4.3.1 対話の概要

まず以下に収録した 4 つの対話を数量的な側面からまとめたものを示す。表中の数字は秒数欄以外、すべて出現回数を示す。（高 1・高 2 は高年齢層群のデータ、低 1・

低 2 は低年齢層群のデータである。)

表 4.1 (UU 数・DU 数)

	分析時間	UU 数			DU 数		
		総数	A	B	総数	「承認」なし	キャンセル
高 1	5 分 3 秒	164	89	75	61	9	4
高 2	3 分 6 秒	114	48	66	36	0	0
低 1	4 分 53 秒	236	117	119	89	3	1
低 2	3 分 24 秒	184	87	97	76	2	0

表 4.2 (「承認」の内訳)

	「承認」総数	多重承認	承認なし
高 1	55	3	9
高 2	45	8	0
低 1	87	1	3
低 2	79	0	2

表 4.3 (繰り返しの数)

	継続	承認	修理	修理要求	始動
高 1	5	7	2	1	0
高 2	2	4	2	0	1
低 1	0	8	0	0	0
低 2	0	2	0	0	0

すぐ前の発話中に、あるいは、その一つ前の発話中に、現発話中に含まれる単語が 50% 以上現れるときを「繰り返し」とした。割合はモーラ数で数えた。

表 4.4 (沈黙の数と秒数・フィラーの数)

	沈黙						フィラー
	始動	秒数	承認	秒数	継続	秒数	
高1	8	9・8・9・3・6・6・15・6	2	2.5・0.75	0	-	0
高2	4	2・32・11・2	0	-	0	-	0
低1	0	-	0	-	1	2	4
低2	0	-	0	-	0	-	3

「始動」「承認」欄の数字は、すぐ前の発話が終わってから、「始動」または「承認」までの回数である。「継続」欄の数字は、自発話中の「継続」から「キャンセル」までを示す。

4.3.2 「承認」に関する特徴

[高1]において、「承認」を欠くために基盤化できないDUが9つあった。「承認」がないままに沈黙に移行する、「承認」を行わずに「始動」を行う、の2通りがあった。[低1][低2]における「承認」を欠く例は、対話以外のことに気を取られたため、「承認」せずに発話するというものと、同時発話が起こったため、片方の「始動」に対する「承認」がなくなってしまったものである。

「承認」が多重に繰り返されるという現象は、すでに基盤化が行われたにもかかわらず、さらに「承認」を行うというものである。「承認」に対する「承認」を多重「承認」とした。すでに「承認」が終わった段階で出される「ふーん」というような発話はフィラーに分類した。

4.3.3 繰り返しに関する特徴

「継続」欄の繰り返しとは、言い直しのことである。ここに数えたものの他、高年齢層群では発話を小さく区切り、言い直しながら対話を行う傾向があった。

繰り返し語を使った「承認」は高年齢層群にも、低年齢層群にも見られたが、後者の繰り返しは、タレントの名前などの固有名詞、その対話の文脈から発生したローカ

ルな名詞（「にせあゆ」＝浜崎あゆみによく似た人など）、普通名詞であった。高年齢層群の繰り返しは動詞を含む比較的まとまりのある文の繰り返しであった。

「修理」「修理要求」での繰り返しには、同じ文をそのまま繰り返す場合があった。

4.3.4 沈黙に関する特徴

高年齢層群によりも長い沈黙が出現した。高年齢層群のデータは、複数の人がいる比較的騒がしい環境でなされたので、必ずしも途切れることなく話す必要はなかったのかもしれない。しかし時間が長いものがあり、また1秒程度の沈黙についても数回あった。環境あわせて検証する必要がある。

低年齢層群には目立つ沈黙はほとんど見られなかった。話題の途切れ目などには「ふーん」などのフィラーが見られた。

4.3.5 その他の特徴

高年齢層群には次のような例が見られた。

- ・話し手が途中で言い止めたところで「承認」を行う（1例）
- ・聞き手が先取りして言う（1例）
- ・協力して完成させる（1例）

低年齢層群には、他人の発話に「継続」するような例があった。

4.4 考察

「承認」、沈黙、繰り返しについて年齢層群によって違いがあったが、有意差はなかった。わずかな違いであるが、「承認」における違いは、基盤化終了地点の違いであるので、「わかり」に関して、年齢によってなんらかの差があるのかもしれない。高年齢層群における繰り返しが、対話において顕現的なものではなく、普通のことばや動詞を含む文の繰り返しであることは、高年齢層群の対話が、より協力的なしかたでなされることを暗示しているのかもしれない。また高年齢層群に沈黙が多いことは、

沈黙に対する許容度が異なることを示している可能性がある。

発話内容を理解することは、人間の内部的な現象であるので、外部からは直接見えない。対話における理解を知るためには、基盤化過程を可視化して、観察する必要がある。「承認」と付することのできる発話によって、私達は人間の内部で起こっていると想定される「わかった」という現象を知ることができる。しかし、「承認」という表現は「わかった」という機能を持つだけではない。共同行為である対話には、談話義務と呼ばれる対話の規則がある。これは例えば、質問をされたら答えなければならない、というような規則である (Traum & Allen, 1994)。対話には義務というほど強いものでなくても、話しかけられたらタイミングよく答える、話し続ける相手に対してタイミングよく注目を向けつづける、というようなより拘束力の弱い規則が存在すると思われる。つまり対話における表現は、人間の内的世界を表わすと同時に、外部世界の規則にも従わなければならない。

外部世界の規則が強く働き、この規則に従うことが優先されるとすると、例えば発話速度が遅くなっている人は、タイミングよくうなづくことを優先し、内容の理解がおろそかになるという可能性も考えられる。対話の規則からはずれた行為はこのような場合、見えにくくなると考えられる。

5. 観察

80 歳代の成人と 20 歳代～30 歳代の成人 22 人の対話について観察を行い、うち 20 人についての分析を行った。

5.1 収録

5.1.1 高年齢層群のデータ収集

高年齢層群の日常会話データの収集を 2001 年 9 月に石川県で実施した。

協力者

1. 同年代の女性成人を 2 人 1 組として日常会話を行ってもらった。高年齢層群として 12 人、6 組の協力を得ることができた。
2. 平均年齢は 83 歳であった。
3. 全員が石川県石川郡鶴来町在住者であった。
4. 協力者同士の知り合い期間は非常に長く、生まれたときから、あるいは結婚後の知り合いであった。ただし若い時は忙しく、よく話しをするようになったのは老人会（当時 60 歳以上が参加可能）に入ってからの方がほとんどであった。
5. 協力者には、石川県石川郡鶴来町の老人福祉センター「蓬莱荘」の職員から、当日会話データの収集を行うことを伝えてもらい、その後研究者が「普段通りに話しをしてください」と簡単な説明を行った。
6. 協力者に対しては金品によるお礼は支払わなかった。

収集場所

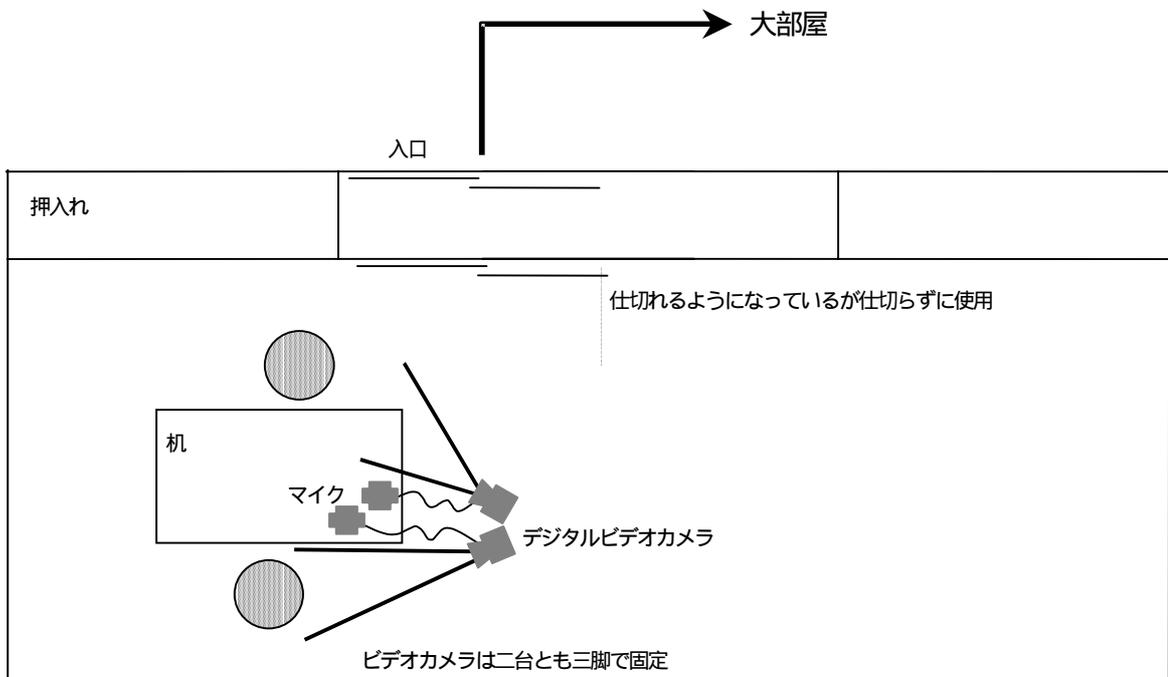
1. 老人福祉センター「蓬莱荘」内の一室（和室）を使用した。
2. 高齢者は地区毎に決められた日程で集まって来るが、大部屋に十数人が集まっ

ているところへ職員から説明をしてもらい、2人ずつ小さな和室に来てもらった。集まってきた人は、必ずしもその大部屋にいる必要はない。施設内の温泉や運動用具などを自由に利用することができる。また設置されたテレビを見ることがもできる。

収集方法

1. デジタルビデオカメラ 2 台によって録画した。カメラに接続した 2 台のマイクで音声を録音した。1 台のカメラで 1 人の上半身を撮影するようにした。
2. ビデオカメラはあらかじめ設置しておいた。
3. ビデオカメラや協力者の配置は図 5.1 のようになっていた。
4. 各組 40 分から 1 時間程度の対話を行ってもらった。
5. 録画の最中、協力者は 2 人きりとなっていた。
6. お茶などを飲みながら会話をを行った組もあった。

図 5.1 (高年齢層群のデータ収録状況)



5.1.2 低年齢層群のデータ収集

低年齢層群の日常会話データの収集についても 2001 年 9 月に石川県で実施した。

協力者

1. 同年代の女性成人を 2 人 1 組として日常会話を行ってもらった。低年齢層群として 10 人、5 組の協力を得ることができた。
2. 平均年齢は 30.9 歳であった。
3. 全員が北陸先端科学技術大学院大学の所在地、石川県能美郡辰口町の近隣に在住している人たちであった。
4. 協力者同士の知り合い期間は、職場で知り合った 4 組が 3 ヶ月から 1 年半、残り 1 組が学生の時からの知り合いで 5 年であった。
5. 北陸先端科学技術大学院大学の職員を協力者とし、職場の上司に「なるべく仲のよいペアが望ましい」と説明し、推薦してもらった。ペアは同じ部屋で働く同僚同士である。
6. 協力者には、前もって職場上司から会話データの収集を行うことを伝えてもらった。収録時には研究者が「普段通りに話してください」と説明を行った。
7. 協力者に対して少額の礼金を支払った。

収集場所

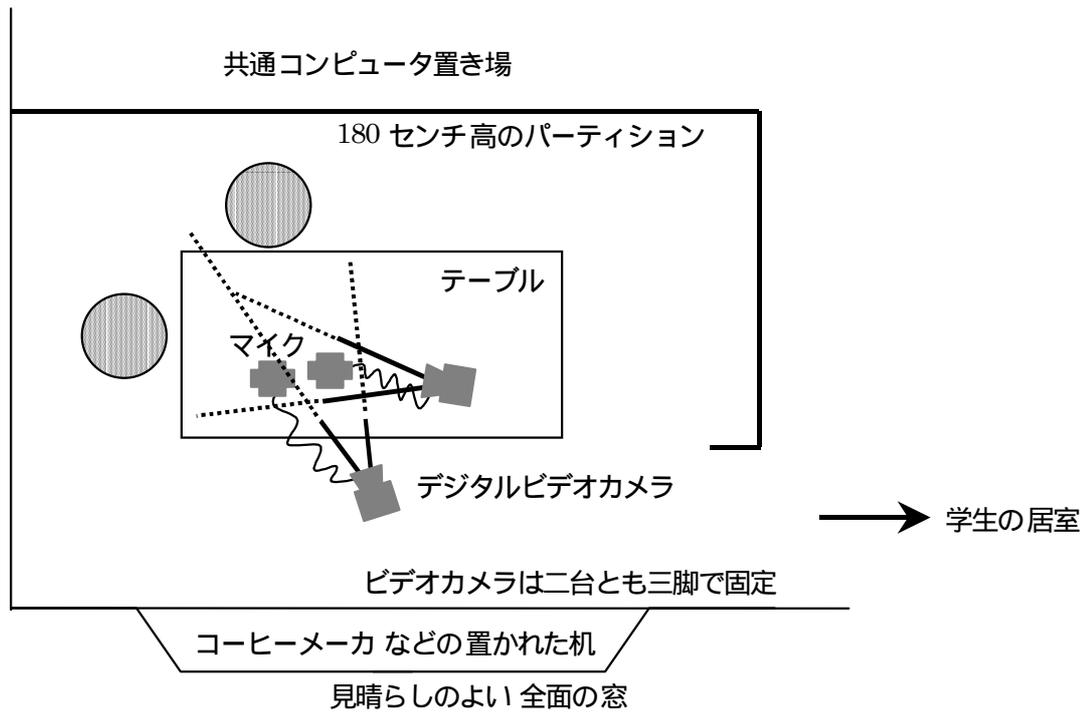
1. 北陸先端科学技術大学院大学内、知識棟 6 階のミーティングスペースを使用した。この場所は普段は学生がミーティングを行ったり、休憩をしたりするスペースである。
2. 協力者には就業後、上記場所まで来てもらった。

収集方法

1. デジタルビデオカメラ 2 台によって録画した。カメラに接続した 1 台のマイクで音声を録音した。1 台のカメラで 1 人の上半身を撮影するようにした。
2. ビデオカメラはあらかじめ設置しておいた。
3. ビデオカメラや協力者の配置は図 5.2 のようになっていた。

4. 各組 1 時間程度の対話を行ってもらった。
5. 録画の最中、協力者は 2 人きりとなっていた。
6. 対話を始める前に、各協力者にコーヒーとお菓子を出した。

図 5.2 (低年齢層群のデータ収録状況)



高年齢層群と低年齢層群のデータ収集についてまとめると以下の表のようになる。

表 5.1 (両群の収録条件まとめ)

	高年齢層群	低年齢層群
人数	6 ペア 12 人 (うち 5 ペアを分析)	5 ペア 10 人
平均年齢	83 歳	30.9 歳
性別	全員女性	全員女性
居住地区	石川県石川郡鶴来町	石川県能美郡辰口町近辺
知り合い期間	出生以来または結婚後。ただし親しくなったのは、60 歳以降。	3 ヶ月～1 年半。1 組は 5 年
親しさ	普段からよく話しをする	普段からよく話しをする
収録場所	老人福祉センター (定期的に訪れる)	職場敷地内別棟 (訪れることもある)
お礼	なし	少額 (直接手渡したのではない)

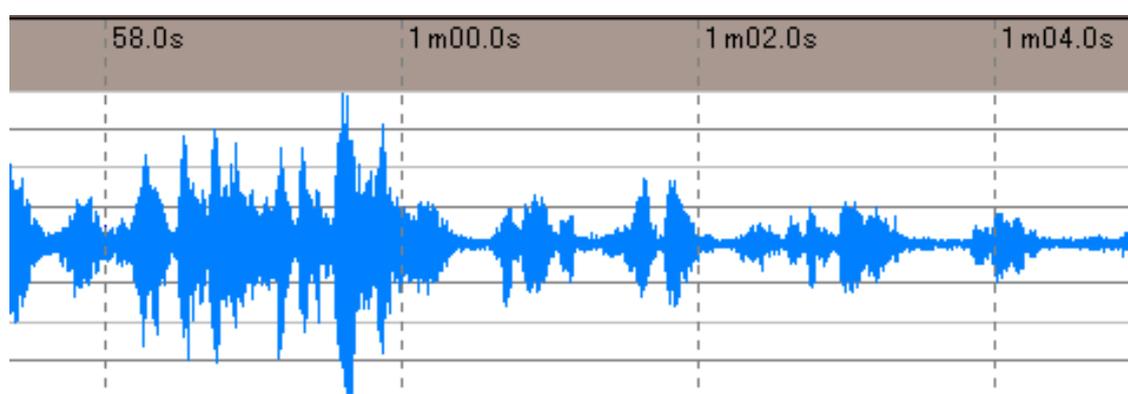
5.1.3 データ準備

研究者が席を外し、2 人だけの会話が始まってから 3 分後の 5 分間を分析対象データとした。高年齢層群の 1 組に関しては、対話途中で別の人に話しかけられる部分があったことと、対話内容が観察そのものに及ぶことが多かった(「早く終わらないかなあ」等)ので、分析対象から除外することとした。

本研究では、ビデオテープで録音した音声に基づいて、ひらがな・カタカナ・漢字を用いて、音声表現の書きおこしを行った。音声表現には、言語表現・笑い声・口笛があった。口笛は 5 ヶ所あったが、すべて同じ協力者によってなされた。うなづき・からだの動き・顕著な表情の変化など、音声以外の表現については、音声表現を書きおこした後、ビデオ映像を見ながらチェックを行った。うなづきが音声を伴わず単独で現れた場合は、これを書きおこした。問いに対して、表情の変化で答えている箇所が 1 ヶ所あったので、この部分に関しては動作を書きおこした。口笛はすべて動作を伴っていたので、この動作(ガムテープを貼る手つき、知らん振り、運転の手つき)を書きおこした。

発話の区切りはポーズまたはイントネーションによった。録音はマイクの位置から、対話者2人だけでなく、周辺の音をすべて拾うものであったので、全くの無音部分をポーズとするわけにはいかなかった。したがってそれを補うため、書きおこし時に録音した声を波形表示(図 5.3)し、それを見ながら行うこととした。同時に発話している部分についても波形表示を補助的に使い、判断して書きおこした。

図 5.3 (音声データの波形表示サンプル)



方言に関しては、書きおこしを行ったのち、近隣地域に在住する人に意味を確かめるという方法を取った。協力者は北陸先端科学技術大学院大学で清掃を担当する60歳代前半の女性3人で、3人とも高年齢層群の住む鶴来町の隣町である辰口町で生まれ育っている。2人はずっと辰口町に住んでおり、1人は現在鶴来町に住んでいるので、方言だけでなく、対象となった高年齢層群の共同体的な共通基盤(地域の行事・畑仕事とのかかわり・一般的な家族構成など)についての知識も持っていると考えられる。音声を聞いてもらい、研究者が理解できなかった部分を中心に解説をしてもらうという方法と、ある程度まとまった部分を聞いてもらい、その話している内容を説明してもらうという方法を併用して、方言や背景知識についての助言を得た。

方言や地名などに関して、そのことばは知らなかったが意味を取る上で差し支えがなかった箇所(地名・屋号と思われる部分や文脈から類推できる部分)が10ヶ所、助言を得たことによって正しく解釈ができるようになった部分が41ヶ所あった。しかし解釈不可能な箇所は数個残った。

5.1.4 データ表記

データ表記は、以下のように行う。

1. 言語表現は、ひらがな・カタカナ・漢字を用いて示す。
2. 各ペアの話者は A と B で示し、本論文中では高年齢層群のペア 1 は (O1) で、低年齢層群のペア 1 は (Y1) で示す。他のペアについても同様。
3. データの番号は (1) から始める。
4. 会話中に固有名詞が使われた場合はプライバシー保護のために別名を使用する。
5. 発話例全体は次のように示す。
 - ・会話例上部の表記は上記の 2、3 による。
 - ・左から、基盤化アクトを示す。右下の添え字は DU の番号を示す。
 - ・その左の数字は、UU の通し番号を示す。 .1 という番号はその話者のその順番の何番目の発話であることを示す。
 - ・A: および B: は話者を示す。: のみが付された部分は上の行と同じ話者であることを意味する。
 - ・A:, B:, : の右側は発話内容である。
 - ・基盤化アクトは「始動」を ack、「継続」を cont、「承認」を ack、「修理」を repair、「修理要求」を reqRepair、「承認要求」を reqAck、「キャンセル」を cancel と表記している。cont (継続) の右側 () の中の数字は、その UU と関連する発話の UU 番号を示す。

以下に書きおこしの一部を示す。

(25)(O1)

UU act	UU	Utterance
init ₅₂	101.1	A: おったらあんた
cont ₅₂ (101.1)	101.2	: あげしてと来るやろ* (着物のたくし上げ)
	102.1	B: *ん
ack ₅₂	102.2	: そやそや (笑)
init ₅₃	103.1	A: ほいでそれまたせんなやろ
ack ₅₃	104.1	B: ん

6. 発話内容部分では次の記号を使う。

(不明) 内容が聞き取れなかった部分・意味不明の部分

(笑) 笑い

(うなづき) うなづき

[0.5] [] 内に表記した数字はポーズの秒数

発話表記の右側の()内には、必要に応じて方言などの解説を示す

話者の動作も()内に表記した

* 2人が同時に発話しているときは、その発話部分に*を付した

例においてはUU101.2の「ろ」とUU102.1の「ん」がほぼ同時に発話された

5.2 分析方法

5.2.1 言語表現に関する基盤化アクト付与

ポーズまたはイントネーションで区切ったUUの一つ一つについて基盤化アクトを付与した。基盤化の観点から意味を持たないUU(フィラー、独り言)に関しては、基盤化アクトを付与しなかった。また片方の発話途中で他方が「ん」などをバックグラウンドで発話し、その発話終了後に「ん」などを発話したのと同じ人が「承認」の機能を持つ発話をした場合については、先に発話された「ん」などに関しては、基盤化アクトを付与しなかった。付与基準はTraumの基盤化アクトの定義に拠った。

同時に発話したため、発話の途中で笑い出したため、あるいは録音が不明瞭なために聞き取れなかったUUに関しては、前後の音声から判断して基盤化アクトを付与した。

5.2.2 非言語表現に関する基盤化アクト付与

笑い・うなづき・からだの動き・顕著な表情の変化など非言語情報についても、基盤化アクトを付与した。

1. 笑い：片方の発話途中に現れる他方の笑いには「承認」を付した。「承認」の後で、片方が笑い始め、他方がそれに引き続き、あるいはほぼ同時に笑う場合には基盤化アクトは付与しなかった。
2. うなづき：うなづきには、「承認」を付与した。
3. 顕著な表情の変化：1例あり、基盤化アクトを付した。「目を見開いてにんまり」としたもので、そのすぐ前の発話に対する返事だと考えられるので、「承認」+「始動」を付した。
4. 口笛：口笛は5ヶ所あり、すべて一人の協力者によってなされた。口笛が吹かれた場合は、そのときの動作と表情を書きおこした。すべてすぐ前の発話を受けて吹かれたもので、大きな動作（すぐ前の発話内容を手つきで示すなど）を伴っているので、これらには一つを除き「始動」を付与した。「承認」を同時に付与したものもある。基盤化アクトを付与しなかった一つについては、その口笛および動作のあと、他方が笑いで応えているためである。本研究では言語表現に関連するものだけを取り扱うことにしたので、非言語に対して非言語で受けているものは除くこととした。

低年齢層群の1組においては、他の組よりも全体的に沈黙の時間が長く、発話内容も深刻なものだったため、3ヶ所の沈黙に関しては、「承認」の基盤化アクトを付与した。3ヶ所とも沈黙時間が長く（5秒以上）視線を落としつづける、または、うなづきもせずじっと相手を見つめる、状態であったので、相手の発話について理解した上でそのような行動をとっていると判断した。

5.2.3 付与した基盤化アクトの信頼性検証

研究者が付与した基盤化アクトの正確性についての信頼性を検証するための実験を行った。

基盤化アクトの中心概念、各アクトの定義、付与の方法について記述した手引書を作成した。(付録参照。)実験一日目にそれを被験者に読んでもらい、質問を受け付け、その後付与練習を行ってもらった。実験二日目に実際に収録したデータについて、音声を聞きながら基盤化アクトを付与する作業を行ってもらった。実験に使用したデータは低年齢層群 1 対話の約半分(2分30分程度)と高年齢層群の 1 対話の約半分(2分30分程度)であった。付与作業中は手引書を自由に参照してもらった。被験者は 2 人。被験者には実験終了後、礼金を支払った。

Cohen's Kappa によって被験者 2 人と研究者、計 3 人の一致率を計算した。低年齢層群のデータについては $K=.71$ (データ数=128、コード数=3)、高年齢層群のデータについては $K=.77$ (データ数=135、コード数=3) であった。Fliess (1981) は $K=.75$ 以上を非常によい (excellent)、 $K=.40 \sim .75$ をよい (good) としているのので、得られた値から、今回の研究において付与した基盤化アクトは、ほぼ信頼に足りるものだと結論づけることができた。

5.3 結果

5.3.1 対話の概要

以下に今回分析した 10 対話を数量的な側面からまとめたものを示す。

まず、UU 数・DU 数について見てみる。下表では左側に各 5 対話の合計・平均を示し、その右側に各対話における数を示している。

表 5.2 (高年齢層群：DU 数・UU 数)

	合計	平均	O1	O2	O3	O5	O6
UU 数	1,406	281.2	326	288	286	217	289
DU 数	446	89.2	108	90	91	54	103

4 番目のデータは 5.1.3 に示した理由から分析に含めなかったので欠番となっている。

表 5.3 (低年齢層群：DU 数・UU 数)

	合計	平均	Y1	Y2	Y3	Y4	Y5
UU 数	1,309	261.8	259	273	324	270	183
DU 数	482	96.4	87	115	130	93	57

5 分間における DU 数・UU 数の合計は、年齢層による大きな違いはないと言える。以下、ほぼ同じ数のデータが得られたとして論じていく。

次に基盤化アクトの出現分布について見てみる。以下の 2 つの表中の各基盤化アクトの割合は、基盤化アクト合計数に対する割合である。一つの UU に複数の基盤化アクトが付与されることもあるので、上表の UU の総数と各基盤化アクト合計数は一致しない。

表 5.4 (高年齢層群：基盤化アクト数内訳)

	合計	平均	O1	O2	O3	O5	O6
始動 (init)	446(30.6)	89.2	108(32.4)	90(29.5)	91(30.6)	54(24.4)	103(34.2)
継続 (cont)	436(29.9)	87.2	106(31.8)	75(24.6)	91(30.6)	96(43.4)	68(22.6)
承認 (ack)	479(32.9)	95.8	104(31.2)	107(35.1)	99(33.3)	60(27.1)	109(36.2)
修理 (repair)	3 (0.2)	0.6	0 (0.0)	2 (0.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.3)
キャンセル (cancel)	0 (0.8)	0	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
承認要求 (reqAck)	11 (0.8)	2.2	0 (0.0)	5 (1.6)	1 (0.3)	0 (0.0)	5 (1.7)
修理要求 (reqRepair)	1 (0.1)	0.2	0 (0.0)	1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
付与せず	81 (5.6)	16.2	15 (4.5)	25 (8.2)	15 (5.1)	11 (5.0)	15 (5.0)
	1,457	—	333	305	297	221	301

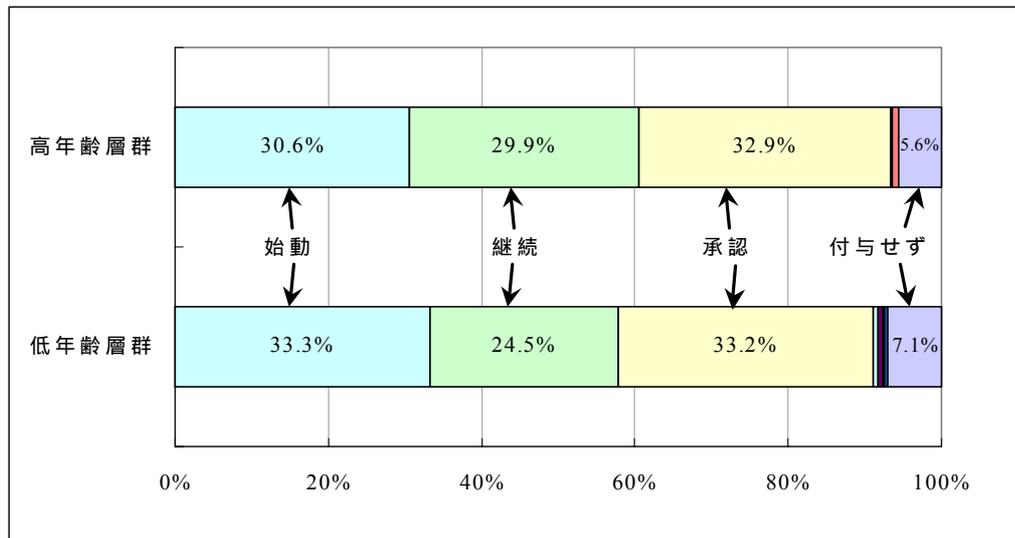
()内の数字は%

表 5.5 (低年齢層群：基盤化アクト数内訳)

	合計	平均	Y1	Y2	Y3	Y4	Y5
始動 (init)	482(33.3)	96.4	87(31.5)	115(35.9)	130(34.9)	93(32.7)	57(29.4)
継続 (cont)	355(24.5)	71	80(29.0)	65(20.3)	92(24.7)	73(25.7)	45(23.2)
承認 (ack)	481(33.2)	96.2	91(33.0)	113(35.3)	129(34.6)	93(32.7)	55(28.4)
修理 (repair)	10(0.7)	2	1(0.4)	2(0.6)	3(0.8)	1(0.4)	3(1.5)
キャンセル(cancel)	8(0.1)	1.6	0(0.0)	2(0.6)	0(0.0)	3(1.1)	3(1.5)
承認要求 (reqAck)	2(0.1)	0.4	2(0.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
修理要求(reqRepair)	6(0.4)	1.2	1(0.4)	1(0.3)	1(0.3)	0(0.0)	3(1.5)
付与せず	103(7.1)	20.6	14(5.1)	22(6.9)	18(4.8)	21(7.4)	28(14.4)
	1,447	—	276	320	373	284	194

()内の数字は%

図 5.4 (基盤化アクト数内訳比較)



どちらの年齢層においても、ペアによっては基盤化アクトの割合にややばらつきが見られるが、基盤化アクトの分布率にほとんど差はないことがわかる。どちらも「始

動」「継続」「承認」がそれぞれほぼ3割を占め、残りの基盤化アクトの出現率は小さい。

最後に基盤化された DU 数と基盤化されなかった DU 数を示す。なお対話データは分析対象時間を5分としたため、最後の DU の基盤化状況が不明の場合があった。この場合はその DU を総 DU 数から除外した。

表 5.6 (高年齢層群：DU の基盤化状況)

	合計	平均	割合	O1	O2	O3	O5	O6
総 DU 数 (以下 DU 数の内訳)	444	88.8	100%	108	90	90	53	103
基盤化された DU	427	85.4	96.2%	100	88	86	53	100
基盤化されなかった DU	17	3.4	3.9%	8	2	4	0	3
以下は基盤化されなかった DU 数の内訳								
キャンセルされた	0	0	0.0%	0	0	0	0	0
暗示的にキャンセルされた	4	0.8	0.9%	3	0	1	0	0
同時発話のため基盤化されなかった	11	2.2	2.5%	5	1	3	0	2
その他の理由で基盤化されなかった	2	0.4	0.5%	0	1	0	0	1

表 5.7 (低年齢層群：DU の基盤化状況)

	合計	平均	割合	Y1	Y2	Y3	Y4	Y5
総 DU 数 (以下 DU 数の内訳)	478	95.6	100%	87	114	129	92	56
基盤化された DU	451	90.2	94.4%	86	108	121	87	49
基盤化されなかった DU	27	5.4	5.7%	1	6	8	5	7
以下は基盤化されなかった DU 数の内訳								
キャンセルされた	8	1.6	1.7%	0	2	0	3	3
暗示的にキャンセルされた	8	1.6	1.7%	0	1	3	0	4
同時発話のため基盤化されなかった	11	2.2	2.3%	1	3	5	2	0
その他の理由で基盤化されなかった	0	0	0.0%	0	0	0	0	0

上表によると基盤化された DU 数は高年齢層群で 96.2%、低年齢層群で 94.4%であり、ほとんどの発話は基盤化されていることがわかる。

基盤化されなかった DU について見てみると、まずキャンセル(これは「じゃない

違う」などという明確な発話を伴うものである)および暗示的なキャンセル(「じゃない違う」などという明確な発話なしで話者が話題を変える)は、話者により基盤化が必要ないとされた DU であるので、基盤化されなかった理由は明らかである。次に同時発話によって基盤化されなかったと DU とは、ほぼ同時に発話されることによって、片方が他方に発話番を譲り、その発話が基盤化されなかったものである。この場合も、基盤化されなかった理由は明らかである。したがってはっきりした理由なしに基盤化されなかった DU は高年齢層群の 2DU のみである。

はっきりした理由なしに基盤化されなかった 2 例のうち 1 つは、片方の発話のすぐ後に他方が鼻をかむという動作を行っていた。1 つは約 0.5 秒後に何か他のことを思いついた、とでもいふべき表情を浮かべたものである。

5.3.2 「承認」を中心とした基盤化アクト分析

高齢者の「ものわかり」の観点から、聞き手の理解や注目を意味する「承認」を中心とした分析を最初に示す。

5.3.2.1 「承認」+「始動」出現数の比較

一つの UU に「承認」と「始動」とが付与された UU について見てみる。以下のような場合である。

(1)(O2)

UU act	UU	Utterance
init ₁₇	35.1	A: ほねら
cont ₁₇ (35.1)	35.2	: こねだ(笑)
cont ₁₇ (35.2)	35.3	: 医者そう言いました*
ack ₁₇ init ₁₈	36.1	B: *あほんないかった
ack ₁₈	37.1	A: ん
init ₁₉	38.1	B: それ聞いたら*安心やわの

この例では、UU36.1 の部分が「承認」+「始動」にあたる。B の「あほんないかっ

た」という発話は、A が医者に言われた内容を理解し、それに対して、「よかった」という判断を示している。B のこの発話は理解と新しい内容を含むことになる。

(2)(O3)

UU act	UU	Utterance
init ₅₅	108.2	B: うちいても
cont ₅₅ (108.2)	108.3	: あんな*
ack ₅₅ init ₅₆	109.1	A: *やっぱりおみやあぼけえとって
ack ₅₆	110.1	B: ん
init ₅₇	111.1	A: やっぱり知り合いなことを思い出しやあな*
ack ₅₇ init ₅₈	112.1	B: *ほうなつかし*
ack ₅₈	113.1	A: *の

この例では、UU109.1 と UU112.1 が「承認」+「始動」である。UU109.1 の A の発話は、それまでの話しの流れから B 言いたいことを察しての発話である。UU112.1 では今度は B が A の言いたいことを察している。理解せずに察することはできないので、このような場合はすぐ前の発話を理解し、新たな DU を始めていることになる。

(3)(Y2)

UU act	UU	Utterance
init ₁₆	22.2	B: 金曜日行けそうやね[0.7]
ack ₁₆ init ₁₇	23.1	A: なあたしでも
ack ₁₇ init ₁₈	24.1	B: なんやね(笑)
ack ₁₈ init ₁₉	25.1	A: でもわたし
cont ₁₉ (25.1)	25.2	: どうしよわたし今日こそ*
ack ₁₉ init ₂₀	26.1	B: *あなた
cont ₂₀ (26.1)	26.2	: 明日がんばって
ack ₂₀ init ₂₁	27.1	A: わたし今日だか残業しようと*思っったけどんね

上の例のように「承認」+「始動」が連続する場合もある。UU23.1 で A はすぐ前の発話内容に反対している。反対や否定はすぐ前の発話を理解しないとできないので、「承認」+「始動」ということになる。この例では、反対と否定が UU23.1、UU24.1、UU25.1 と続いている。UU26.1 では B は A の発話をさえぎる形で暗示的に反対をしている。UU27.1 もまた反対である。

(4)(Y1)

UU act	UU	Utterance
init ₂₉	57.1	A: まったくの*
ack ₂₉	58.1	B: *ん
init ₃₀	59.1	A: 専業主婦だけっていう期間ってあったんですか
ack ₃₀	60.1	B: んあったよ
init ₃₁	60.2	: やっぱり
ack ₃₁ init ₃₂	61.1	A: 子どもさんがちっちゃいとき
ack ₃₂ init ₃₃	62.1	B: うーんとね
cont ₃₃ (62.1)	62.2	: んちょっと子ども
cont ₃₃ (62.2)	62.3	: 体弱いねんうち下の子が
ack ₃₃	63.1	A: んーん*

この例でも UU61.1 と UU62.1 に「承認」+「始動」の連続が見られる。UU61.1 で A はすぐ前の B の発話内容を踏まえた上で新しい内容を推測して付け加えている。この発話はすぐ前の発話を理解していないとできない。UU62.2 では、B はすぐ前の A の発話内容を理解し、さらに話しを続けようとしている。

以下に数と割合を示す。

表 5.8 (高年齢層群:「承認」・「承認」+「始動」の数と割合)

	合計	平均	O1	O2	O3	O5	O6
承認 (ack)	479	95.8	104	107	99	60	109
承認 + 始動(ack+ init)	51	10.2	7	17	11	4	12
承認 + 始動 / 承認	—	10.3%	6.7%	15.9%	11.1%	6.7%	11.0%

表 5.9 (低年齢層群:「承認」・「承認」+「始動」の数と割合)

	合計	平均	Y1	Y2	Y3	Y4	Y5
承認 (ack)	481	96.2	91	113	129	93	55
承認 + 始動(ack+ init)	138	27.6	17	47	49	14	11
承認 + 始動 / 承認	—	26.7%	18.7%	41.6%	38.0%	15.1%	20.0%

上の2つの表より、高年齢層群の対話には「承認」+「始動」と付与された UU が

少ないことがわかるが、t 検定の結果、高年齢層群と低年齢層群の平均の差は有意傾向にあることが明らかになった（両側検定： $t(5)=2.87$ ， $.01 < p < .05$ ）。

表 5.10（「承認」 + 「始動」 / 「承認」の平均と標準偏差）

	高年齢層群	低年齢層群
N（データの個数）	5	5
\bar{X} （データの値の平均）	0.103	0.267
SD（データの値の標準偏差）	0.038	0.122

「承認」 + 「始動」が付与される UU は、相手の発話への理解を前提として新しい DU を始めるという点で、相手の言うことに対して、うなづいたりあいづちをうったりする「承認」よりも証拠性が強いと考えられる。「ものわかり」という観点から聞き手側の行為に注目すれば、話し手の提案を考慮したという明確な証拠を話し手に与えることになるからである。

5.3.2.2 「承認」 + 「始動」以外の「承認」の分析

証拠性という観点から、「承認」とだけ付された UU についても分析を行った。証拠性のより強い発話として Clark は、相手の質問に答える発話（「展示」にあたる）相手の発話を繰り返したり、言い換えたりする発話（「例示」にあたる）を挙げている。相手の質問に答えたり、繰り返したりする発話は、その前の発話内容に依るので、その都度、内容が変わる。より証拠性の弱い発話として、“uh huh”、“I see”、“m”（日本語では、「ん」「うん」などがこれにあたる）やうなづきや微笑を挙げているが、「ん」や「うん」などはそのときに話されている内容によって変化するものではない。つまり汎用度の高い発話は証拠性が弱く、汎用性のないものは証拠性が強いと考えることができる。

ただし、汎用的に用いられることのある「ん」「うん」などの中には、韻律的特徴（長く引っ張って発話する・強い調子で発話する・音量が落ちない）から、必ずしも汎用的に使用されるとは限らないものもある。このような韻律特徴を持つ発話は、そ

の場その場に応じて韻律が選ばれるため、汎用的ではないと考えられる。

そこで次の条件にあてはまる「承認」と付した発話を汎用的なものとして分類した。

1. 以下の特徴を備えた短い発話。

- ・ 「あ」「ああ」「あおん」「あん」「うう」「うん」「お」「おう」「おお」「そうか」「そうや」「は」「はぁぁ」「ふうん」「ふん」「ほ」「ほう」「ほう」「ほお」「ん」「ん ん」「んん」「んーん」と表記された発話。
- ・ 上に挙げた短い発話後、間を置かず同じ話者による「始動」が来る場合は、その2つの発話を合わせると汎用と見なしがたいので除外した。
- ・ 他方の話者の発話と重なって発話されたか、音量を落として発話された場合。上に挙げた短い発話であっても、それが強い調子で言われた場合や音量が落とされなかった場合は除外した。

2. うなづき。

今回の観察で見られた「笑い」は、音声を伴わない「微笑」ではなく、音声を伴う「笑い」であった。このような笑いは状況によって適切に出される必要があり、また音声表現として相手により強い証拠を与えると考えられるため、汎用ではないとした。

上記で定義した発話の例を示す。まず汎用「承認」の典型的な例である。

(5)(Y4)

UU act	UU	Utterance
init ₂₄	46.1	B: で親戚の人
cont ₂₄ (46.1)	46.2	: 来てんけどパック中やしでれんがいね*
ack ₂₄	47.1	A: *ん
init ₂₅	48.1	B: でで部屋ですっとじっとしとったら
ack ₂₅	49.1	A: (笑)
init ₂₆	50.1	B: なんかその
cont ₂₆ (50.1)	50.2	: 親戚の人帰る
cont ₂₆ (50.2)	50.3	: ころになって
ack ₂₆	51.1	A: ん
init ₂₇	52.1	B: おかあさんが来て
cont ₂₇ (52.1)	52.2	: あんた挨拶せんかいねって*

この例では UU47.1 と UU51.1 は「ん」という短い発話であり、UU47.1 は前の発話と重なっている。UU51.1 は音量を落として発話されていた。

(6)(O5)

UU act	UU	Utterance
init ₃	5.1	A: ほど
cont ₃ (5.1)	5.2	: あのあんたあの
cont ₃ (5.2)	5.3	: リハビリしたって
cont ₃ (5.3)	5.4	: そんなもな
cont ₃ (5.4)	5.5	: ちやすと治こってないし(すぐに治ることもないし)
ack ₃	6.1	B: (うなづき)
init ₄	7.1	A: ほしてうちにかておばあちゃんがおらんさけへる[1.0]
ack ₄	8.1	B: (うなづき)
init ₅	9.1	A: たんぼしとっさけに稲刈りあっしあんた[0.9]
ack ₅	10.1	B: (うなづき)

上記は、うなづきの例である。A の発話に対し、B は UU6.1、UU8.1、UU10.1 でうなづきを返している。

以下の例は、汎用「承認」とみなさなかつたものである。

(7)(O1)

UU act	UU	Utterance
init ₁	2.1	B: ほら三号車乗んなんわって*
ack ₁	3.1	A: *(笑)*
init ₂	4.1	B: *いっしょけんめに三号んところへ
cont ₂ (4.1)	4.2	: 旗三本見といて*
ack ₂	5.1	A: *うんうん見て
init ₃	6.1	B: ほいて*行ったら満員ややっぱ*
	7.1	A: *ん
ack ₃	7.2	: *ああ

UU5.1 は UU4.2 の一部を繰り返している。これは汎用ではない。UU3.1 は笑いなので、UU7.2 は声を高めて発音されたので、汎用とはみなさなかつた。

以下に「承認」とその内訳の数を示した表と、割合を示したグラフを記す。

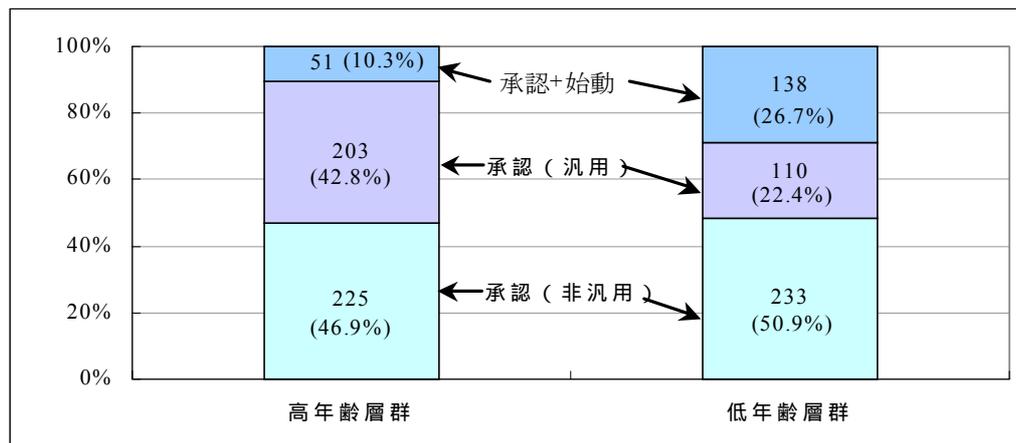
表 5.11 (高年齢層群：「承認」数の内訳)

	合計	平均	O1	O2	O3	O5	O6
承認 (総数)	479	95.8	104	107	99	60	109
承認 + 始動	51	10.2	7	17	11	4	12
承認 (汎用)	203	40.6	43	27	42	29	62
承認 (非汎用)	225	45	54	63	46	27	35

表 5.12 (低年齢層群：「承認」数の内訳)

	合計	平均	Y1	Y2	Y3	Y4	Y5
承認 (総数)	481	96.2	91	113	129	93	55
承認 + 始動	138	27.6	17	47	49	14	11
承認 (汎用)	110	22	38	21	25	20	6
承認 (非汎用)	233	46.6	36	45	55	59	38

図 5.5 (「承認」数の内訳比較)



高年齢層群は、汎用「承認」を多く用いる傾向があることが見てとれるが、² 検定の結果、「承認」数の偏りは有意であった ($\chi^2(2) = 67.6, p < .01$)。

表 5.13 (「承認」の内訳)

	承認 + 始動	承認 (汎用)	承認 (非汎用)	計
高年齢層群	51 (94.3)	203 (156.1)	225 (228.5)	479
低年齢層群	138 (94.7)	110 (156.8)	233 (229.5)	481
計	189	313	458	960

()内は期待度数

そこで残差分析を行った結果、表 5.13 に見られるように汎用的に使用される「承認」の UU は高年齢層群では多く、低年齢層群では少なくなっていることがわかった。

表 5.14 (「承認」の内訳：残差の一覧表)

	承認 + 始動	承認 (汎用)	承認 (非汎用)
高年齢層群	-7.03**	6.45**	-0.46
低年齢層群	7.03**	-6.45**	0.46

** を付したセルは | 残差 | > 2.58 となり、 $p < .01$

5.3.2.3 基盤化終了地点に特徴のあった DU

今回の観察では、数は少ないながら、次のように基盤化終了地点で特徴が見られた。

表 5.15 (高年齢層群：基盤化終了地点に特徴のあった DU 数)

	合計	平均	O1	O2	O3	O5	O6
基盤化が離れた UU によってなされた	3	0.6	1	1	0	0	1
「承認」後に「承認要求」を行った	9	1.8	0	4	1	0	4
「承認」後に「承認」を行った	35	7	4	10	10	6	5

表 5.16 (低年齢層群：基盤化終了地点に特徴のあった DU 数)

	合計	平均	Y1	Y2	Y3	Y4	Y5
基盤化が離れた UU によってなされた	7	1.4	3	4	0	0	0
「承認」後に「承認要求」を行った	0	0	0	0	0	0	0
「承認」後に「承認」を行った	25	5	3	5	7	5	5

まず「基盤化が離れた UU によってなされた」というのは、次の DU が始まってから、前の DU に対して「承認」がなされたということである。これらはすべて同時に発話がなされた場合に発生した。以下の例がそれにあたる。

(8)(Y1)

UU act	UU	Utterance
init ₃₅	66.1	B: 看病でえ*
ack ₃₅	67.1	A: *ん
init ₃₆	68.1	B: 病院とかに行っし
cont ₃₆ (68.1)	68.2	: あと
ack ₃₆ init ₃₇	69.1	A: *大変
init ₃₈	70.1	B: *なんて言うのかな
ack ₃₇	70.2	: ん
cont ₃₈ (70.1)	70.3	: なんかまあ
cont ₃₈ (70.3)	70.4	: うち下の子がまあとにかく手がかかるえん

B は UU68.1 の「あと」を 0.9 秒程度に引き伸ばして発話した。その切れ目で A が「大変」(UU69.1) を発話したが、この発話より約 90 ミリ秒程度遅れて A が「なんて言うのかな」(UU70.1) と発話した。B はこの「なんて言うのかな」を言い終わった後で、A の「大変」に「承認」を行ったと考えられる。

残りの 2 つについては節を改めて述べる。

5.3.2.4 「承認」後に「承認要求」行う

9 例と数は少ないが、高年齢層群が「承認」後に「承認要求」を行ったのに対し、低年齢層群にはこのような発話は見られなかった。

(9)(06)

UU act	UU	Utterance
init ₈₉	172.1	B: *わたし十四で
ack ₈₉	173.1	A: ん
init ₉₀	174.1	B: めろ親おらんげさけ(母親がいないので)
cont ₉₀ (174.1)	174.2	: ご飯ごしらえせんなんやろ
ack ₉₀	175.1	A: ん
init ₉₁	176.1	B: んでわたしだけうちにおってん
ack ₉₁	177.1	A: ん
init ₉₂	178.1	B: ほいで下が
reqAck ₉₂	178.2	: ね
ack ₉₂	179.1	A: ん
init ₉₃	180.1	B: あの
cont ₉₃ (180.1)	180.1	: 中の郷(なかのこう)へやってえ(中の郷:地名)
ack ₉₃	181.1	A: ん
init ₉₄	182.1	B: わたしの下を
ack ₉₄	183.1	A: ん
reqAck ₉₄	184.1	B: ね
ack ₉₄	185.1	A: ん
init ₉₅	186.1	B: ほいできんこも(きんこ:名前)
ack ₉₅	187.1	A: ん

この例では B が DU を開始し、A がそれを基盤化するという流れがずっと続いており、UU183.1 でも A はその流れに乗って「承認」を返している。しかしこの発話は B にとって十分な証拠とならなかったため、UU184.1 に見られるように B は「承認要求」を行った。このように汎用「承認」の後に「承認要求」が続く例は 9 例中 6 例であった。

また次の例のように「承認要求」が証拠性のより強い発話の後に来る場合が 3 例あった。下の例の UU106.1 がそれにあたる。この場合「承認要求」は、証拠が十分であるか否かとは別の要因によってなされるのかもしれない。

(10)(03)

UU act	UU	Utterance
init ₅₄	104.1	B: やっぱり
cont ₅₄ (104.1)	104.2	: うち来たいんやろに*かわいいやな(かわいそうだな)
	105.1	A: *ああ
ack ₅₄	105.2	: 来てえわい*ね(来たいでしょうね)
reqAck ₅₄	106.1	B: *の

ack ₅₄	107.1	A:	おお*
ack ₅₄	108.1	B:	*来ていわの

5.3.2.5 「承認」後に「承認」を行う

予備観察では「承認」の特徴として「承認を欠く」「多重承認を行う」の2つが見られたが、今回の観察においては説明のつかない理由によって「承認」を欠く例は2例しか見られず、特徴とは言えないことがわかった。また「承認」を繰り返す例は、高年齢層群にも低年齢層群にも見られた。

高年齢層群では、同じ人が「承認」を繰り返したのが6回、互いに「承認」を繰り返したのが29回であった。低年齢層群ではそれぞれ9回と16回であった。

(11)(O2)

UU act	UU	Utterance
init ₃₄	64.1	B: 若いもんなまだ
cont ₃₄ (64.1)	64.2	: 元気あっさけなんやけど
cont ₃₄ (64.2)	64.3	: こんなあんた
cont ₃₄ (64.3)	64.4	: 八十から上んなりやあなにをんなありやあんなあ
	65.1	A: ん
cont ₃₄ (64.4)	66.1	B: 衰えるばかりや
ack ₃₄	67.1	A: ほうや
ack ₃₄	68.1	B: んん

上の例では、BのUU66.1に対し、Aが「承認」をなし(UU67.1)、Aがその後にまた「承認」を返している(UU68.1)。互いに「承認」を繰り返し合う例である。(UU65.1は不随意的に言われているため基盤化アクトは付与していない。)

(12)(Y3)

UU act	UU	Utterance
cont ₇₇ (124.2)	124.3	B: でも
ack ₇₇	125.1	A: ん
init ₇₈	126.1	B: 二年も経ってないのに廃車なんて悲しくない
cont ₇₈ (126.1)	126.2	: 新車で買ったのに*
ack ₇₈	127.1	A: *まあね
ack ₇₈	127.2	: まあね

上記は、UU127.1 と UU127.2 に見られるように、同じ人が「承認」を繰り返している例である。

5.3.3 共同補完について

その他の特徴として共同補完・繰り返し応答というものを挙げるができる。共同補完とは、片方の発話の途中またはわずかなポーズに、他方が相手の言いたいであろうことを類推して発話するもので、Clark による貢献の種類の中の「共同補完」にあたる。繰り返し応答とは、直前の発話番に対して応答となっている発話で、前の発話の全部または一部を繰り返すものである。モーラ数で数えて前の発話の 50%以上が、現発話に現れたものを数えた（片桐・下嶋・Swerts・小磯, 1999）。ただし高年齢層群の 1 例は途中で他方の発話が入ったが、発話途中で重なって言われていたため、これは含めた。以下に数を示す。

表 5.17 (高年齢層群：その他の特徴)

	合計	平均	O1	O2	O3	O5	O6
共同補完	13	2.6	2	3	5	0	3
繰り返し応答	23	4.6	3	3	7	3	7

表 5.18 (低年齢層群：その他の特徴)

	合計	平均	Y1	Y2	Y3	Y4	Y5
共同補完	7	1.4	4	0	1	2	0
繰り返し応答	10	2	4	2	2	1	1

ここでは共同補完について述べる。以下に発話例を挙げる。

(13)(O1)

UU act	UU	Utterance
init ₃₅	71.2	A: んであまり遠慮しとるがもなんやし
cont ₃₅ (71.2)	71.3	: ほうかちちでもろて食べて(そうですかと言って)

cont ₃₅ (71.3)	71.4	:	してんけど
cont ₃₅ (71.4)	71.5	:	そしたらやっぱ体も楽ん*
ack ₃₅	72.1	B:	*そうや
init ₃₆	72.2	:	やっぱね*
ack ₃₆	73.1	A:	*ん
init ₃₇	74.1	B:	一人おるがと
ack ₃₇	75.1	A:	ん
init ₃₈	76.1	B:	みなとおるがと
cont ₃₈ (76.1)	76.2	:	でぶ気分が
ack ₃₈ init ₃₉	77.1	A:	違*うが
ack ₃₉	78.1	B:	*違ごたってね
init ₄₀	79.1	A:	気分的に違ごさっけね*
ack ₄₀	80.1	B:	*ん
init ₄₁	80.2	:	やっぱ外へ*出てくっと
	81.1	A:	*ん
ack ₄₁	81.2	:	そやそや

この例では、UU77.1 の部分が共同補完にあたる。それまでの話しの流れから、A は次に話される内容を類推し、B の UU76.2 を完成させている。

(14)(O3)

UU act	UU	Utterance
init ₈₀	152.1	B: おお
cont ₈₂ (152.2)	152.2	: ほいたら[0.5]
cont ₈₂ (152.3)	152.3	: わて
ack ₈₂	152.4	: じょうろで夕方水やっては*
init ₈₃	153.1	A: *ん
	154.1	B: ほいたまたござの腐ったんほいで*かけて
ack ₈₃	155.1	A: *ほ
init ₈₄	155.2	: ほ
cont ₈₄ (156.1)	156.1	B: ほいておいたら
ack ₈₄ init ₈₅	156.2	: 毎日あれ*
ack ₈₅ init ₈₆	157.1	A: *一週間ほどでおえ* (一週間ほどで生えてくる)
ack ₈₆	158.1	B: *一週間ほどでおえるかの*
	159.1	A: ん
init ₈₇	160.1	B: うう[0.6]
cont ₈₇ (160.1)	160.2	: ぬかやらんと[0.6]
cont ₈₇ (160.2)	160.3	: あれぬかやりやよかったかの
init ₈₀	160.4	: あのござやったが

この場合は UU157.1 が共同補完にあたる。この場合も会話の流れから A は B の発

話を類推して、UU156.2 を完成させているが、この場合は畑仕事に関する共同体的な共通基盤のあることも類推に一役買っていると考えられる。

(15)(06)

UU act	UU	Utterance
init ₆₀	107.1	A: 二番目の子
cont ₆₀ (107.1)	107.2	: たかして名前や
ack ₆₀	108.1	B: あ
init ₆₁	109.1	A: その子のできるときに
ack ₆₁	110.1	B: ん
init ₆₂	111.1	A: あな
cont ₆₂ (111.1)	111.2	: そんなな*
ack ₆₂	init ₆₃	B: *大水や出てん*
ack ₆₃	113.1	A: *大水や出てて
init ₆₄	114.1	B: とうぞうも流れて
repair ₆₄	114.2	: とうぞうの大宮さん流れてやる*
ack ₆₄	115.1	A: *流れた

ここでは UU111.2 で A が言いよんだので、B がそれを補って (UU112.1) 完成させている、これが共同補完にあたる。

5.3.4 繰り返し応答について

高年齢層群で 23、低年齢層群で 10 見られた繰り返し応答の例を以下に記す。

(16)(01)

UU act	UU	Utterance
init ₁₅	29.1	A: *なあんも
cont ₁₅ (29.1)	29.2	: 朝起き*たら
cont ₁₄ (28.1)	30.1	B: *(不明)ら
cont ₁₅ (29.2)	31.1	A: くらくら*となった
ack ₁₅	32.1	B: *ん
init ₁₆	33.1	A: こうりゃこんなこと
cont ₁₆ (33.1)	33.2	: 途中なるもんなら[0.5]
cont ₁₆ (33.2)	33.3	: いや*やしなと思てね
ack ₁₆	34.1	B: *いややしな

この例では、UU34.1 が UU33.3 の繰り返し応答となっている。この場合、繰り返しは、バックグラウンドで音量を落として行われ、ていねいに聞けば聞き取れるほどのものであった。韻律特徴から、この応答の証拠性はあまり強くないと考えられる。

(17)(O6)

UU act	UU	Utterance
init ₁	1.1	A: あああなたこ
cont ₁ (1.1)	1.2	: 昔ね[0.9]
cont ₁ (1.2)	1.3	: 手取川からあれ水をして*取ったんげさかい
cont ₁ (1.3)	1.4	: あのあの瀉があったらこそよ
	2.1	B: *おい
ack ₁	2.2	: おおいよ*
init ₂	3.1	A: *たんばあできるがや*(たんばあ：田んぼ)
ack ₂	4.1	B: *できるがや*
	5.1	A: *ん
init ₃	5.2	: いめら水不足てことないわいね[0.6] (いめら：今では)

この例では、UU4.1 が UU3.1 の繰り返しとなっている。この場合は単に情報を再生していると考えられる。

(18)(Y5)

UU act	UU	Utterance
init ₄₈	80.2	B: そんな感じの親の人
cont ₄₈ (80.2)	80.3	: ぱって見ただけで
init ₄₉	80.4	: 普通にお仕事もしたるんやろ
ack ₄₉	81.1	A: 普通に仕事してるよ
ack ₄₉	82.1	B: うん[1.3]

この例では、UU81.1 が UU80.4 の繰り返しとなっている。これは質問に対する答えである。A は前の発話の一部を使って問いに答えている。

6. 考察

以上の分析結果から、年齢層の違いによって対話には次の⁵つの傾向があると考えられる。

6.1 基盤化の単位

基盤化はほぼ同じ大きさで起こっている

基盤化アクトの割合を見てみると年齢層による違いはなく、「始動」「継続」「承認」がそれぞれ3割程度、その他が1割程度であった(図 5.4 参照)。DUは「始動」で始まり、「承認」で基盤化が終了する。もし基盤化されないDUが多ければ、「始動」と「承認」の割合のバランスが崩れてくるはずであるが、両年齢層群ともDUの約95%が基盤化されているので、「始動」と「承認」の割合はほぼ同じであった。

基盤化の終了を示す「承認」の分布について見てみると、以下の2つの表に見られるように年齢による差はなかった。

表 6.1 (高年齢層群 : 「承認」の分布)

	合計	平均	割合	O1	O2	O3	O5	O6
始動のすぐ後	214	42.8	44.7%	42	52	39	22	59
継続のすぐ後	215	43	44.9%	58	37	47	32	41
承認のすぐ後	39	7.8	8.1%	4	12	12	6	5
承認要求のすぐ後	10	2	2.1%	0	5	1	0	4
修理のすぐ後	1	0.2	0.2%	0	1	0	0	0
合計	479	—	100%	104	107	99	60	109

表 6.2 (低年齢層群：「承認」の分布)

	合計	平均	割合	Y1	Y2	Y3	Y4	Y5
始動のすぐ後	240	48	49.9%	40	65	62	47	26
継続のすぐ後	211	42.2	43.9%	43	40	61	44	23
承認のすぐ後	25	5	5.2%	6	6	5	2	6
承認要求のすぐ後	2	0.4	0.4%	2	0	0	0	0
修理のすぐ後	3	0.6	0.6%	0	2	1	0	0
合計	481	—	100%	91	113	129	93	55

これらの表より、基盤化は「始動」のすぐ後で起こるものと、「継続」の後で起こるものが約半々ずつあることがわかる。基盤化の割合が同じであったこと、分布が同じであったことから、基盤化はほぼ同じ大きさの単位で起こっていることがわかった。

文化的な違いによってあいづちの頻度が異なるという研究があるが(メイナード, 1993)この研究によると日本語会話では米会話のほぼ2倍のあいづちを送っている。これは会話に基盤化アクトを付与してその割合を見たものではないが、米会話でのあいづちが2倍ということから推察すると、米会話では「継続」の割合が多くなると考えられる。つまり基盤化アクトの割合は文化によって異なった割合を示すだろうことが予測できる。したがって基盤化アクトの割合がほぼ等しいということは、年齢層に関わらず文化的に適切な単位で基盤化がなされているということである。

対話には、適切なタイミングで応えなければならないという規則がある。加齢によって知覚や記憶の能力は低下する。対話の規則を守るためにどれほどの能力を必要とし、それが知覚や記憶の能力低下とどれほど関わりがあるのかはわからないが、「疲れてくると話しをするのもいやになる」という誰にでも起こりうる状態から考えると、全く無視できるほど小さなものではない。適切な単位で基盤化を行うことは、高齢者になんらかの負担を強いているのかもしれない。負担が大きすぎれば、内容の理解に割く資源が少なくなり、高齢者の「ものわかり」という点にも影響を与えているのかもしれない。

6.2 発話番交換

高年齢層群は発話番非交換型の対話を行う

基盤化の終了を示す「承認」を見てみると、高年齢層群では「承認」+「始動」が少なく、汎用「承認」が多いことがわかった。これをさらに具体的な対話で見てみる。

まず以下に高年齢層群の対話例を挙げる。

(19)(06)

UU act	UU	Utterance
init ₄₈	82.1	B: あんときに
cont ₄₈ (82.1)	82.2	: んな
cont ₄₈ (82.2)	82.3	: たこもんほら(たこもん: 薪)
*ack ₄₈	83.1	A: ん
init ₄₉	84.1	B: 川北の人ら(川北: 地名)
*ack ₄₉	85.1	A: ん
init ₅₀	86.1	B: とうぞからあんな
cont ₅₀ (86.1)	86.2	: たこもん拾らいに出てやる
ack ₅₀	87.1	A: そうやそうや
init ₅₁	88.1	B: ほいでみんなとびみてなもんで(とび: ひっかける道具)
cont ₅₁ (88.1)	88.2	: こう
*ack ₅₁	89.1	A: ん
init ₅₂	90.1	B: 引っ張ってやる
*ack ₅₂	91.1	A: ん
init ₅₃	92.1	B: ほいらたね
cont ₅₃ (90.1)	92.2	: なあん流されて
*ack ₅₃	93.1	A: ん

(汎用「承認」には ack の前に*を付した。)

B が DU を始め、A がそれに対して汎用「承認」で答えるという型の対話が続いている。この部分では A は発話番を一度も取っていない。

それに対し低年齢層群では、以下のようにになっている。

(20)(Y2)

UU act	UU	Utterance
init ₅₈	85.1	A: でも
cont ₅₈ (85.1)	85.2	: ちょっと言うてんて[0.8]
cont ₅₈ (85.2)	85.3	: なんが欲しいどうやって言ったら*
*ack ₅₈	86.1	B: *ん
init ₅₉	87.1	A: じゃちょっと考えときます
cont ₅₉ (87.1)	87.2	: って言っとってんて
ack ₅₉ init ₆₀	88.1	B: あっ
cont ₆₀ (88.1)	88.2	: 主役の人が行かんつもりか[0.5]
cont ₆₀ (88.2)	88.3	: あなんか[1.1]
ack ₆₀ init ₆₁	89.1	A: なんか[2.2]
cont ₆₁ (89.1)	89.2	: ゆうとった都合悪いって*ゆうとったし
*ack ₆₁	90.1	B: *ん
init ₆₂	91.1	A: 遠いし
*ack ₆₂	92.1	B: ん[1.3]
init ₆₃	93.1	A: でもちょっとあんまりかなと思てなんか[0.7]
cont ₆₃ (93.1)	93.2	: わたしにしては珍しく
*ack ₆₃	94.1	B: ん

(汎用「承認」には ack の前に*を付した。)

この部分には「承認」+「始動」が2回現れている。UU85.1でAがDUを始め、そのDUに対しBは汎用「承認」で答えている(UU86.1)が、UU88.1ではBは発話番を取っている。次にUU89.1でAが発話番を取り、その後2回はAがDUを始めている。この例では2回発話番交換が起こっている。

このように高年齢層群では片方がDUを開始し、他方が汎用「承認」で基盤化を終了させるという役割固定型の対話スタイルを取るのに対し、低年齢層群では、双方が発話番を交換しながら対話を行っている。

次にもう少し長い例を見てみる。

(21)(O3)

UU act	UU	Utterance
init ₆₂	117.2	A: ほいてわて今日
*ack ₆₂	118.1	B: ん
init ₆₃	119.1	A: あの
cont ₆₃ (119.1)	119.2	: あれ持ってって
cont ₆₃ (119.2)	119.3	: 今日や蓬莱荘行くなんていわ
cont ₆₃ (119.3)	119.4	: でててい言うことなんなんわ

(わざわざ言う必要もないので)

*ack₆₃ 120.1 B: ん

init₆₄ 121.1 A: きゃああのていーしゃんところへ行こと思てって(今日は医者のところへ行こうと思っていると言おうと思てたが)

cont₆₄(121.1) 121.2 : まだ来んでてようごんとってきとるなまた

ack₆₄ 122.1 B: おおほやほや

init₆₅ 123.1 A: なんださけ*医者んところへ行こうと思て

*ack₆₅ 124.1 B: *ん

init₆₆ 125.1 A: そういおうと思たらなあんも

*ack₆₆ 126.1 B: ん

init₆₇ 127.1 A: よごえてもよごえても返事やねえ

ack₆₇ 128.1 B: あら

init₆₈ 129.1 A: 畑でもいてましね

ack₆₈ 130.1 B: おお畑行ったがや

*ack₆₈ 131.1 A: お

init₆₉ 132.1 B: まあ

cont₆₉(132.1) 132.1 : 暇さえありやあ

*ack₆₉ 133.1 A: お

init₇₀ 134.1 B: 畑行っったさけ

cont₇₀(134.1) 134.2 : んま

cont₇₀(134.2) 134.3 : 畑ありゃこそや

ack₇₀ 135.1 A: そうや

init₇₁ 136.1 B: そういうああなかってそうや*
(そういう自分たちだってそうだ)

ack₇₁ 137.1 A: *そやそや*

init₇₂ 138.1 B: *畑ありゃがこそや[0.7]

ack₇₂ 139.1 A: (笑)

init₇₃ 140.1 B: 夕方になっても

cont₇₃(140.1) 140.2 : たまねぎまいてがうすうかっての
(タマネギの種を蒔いたが少なかった)

*ack₇₃ 141.1 A: ん

init₇₄ 142.1 B: ほいてあぁこれじゃちょっこり足らんかもしれん

*ack₇₄ 143.1 A: ん

init₇₅ 144.1 B: また農協行って二袋こうてきてん

*ack₇₅ 145.1 A: ん

init₇₆ 146.1 B: ほてまいて*

ack₇₆ init₇₇ 147.1 A: *ほいて

cont₇₇(147.1) 147.2 : まだ*

ack₇₇ init₇₈ 148.1 B: *まだおえん(まだ生えてこない)

*ack₇₈ 149.1 A: お

init₇₉ 150.1 B: おやっぱ十日ほど*おえんぞなありや

151.1 A: *あぁ

ack₇₉ 151.2 : せやな

(汎用「承認」には ack の前に*を付した。)

ある一連の話題を提供する側を語り手とし、それに答える側を聞き手とするならば、ここでは、まず A が語り手となり DU を開始させ、それに対して B が主に汎用「承認」で DU を終了させていく。UU132.1 以降は B が語り、A が主に汎用「承認」で DU を終了させるという流れになっている。このように高年齢層群の対話は、語り手が交替しても、発話番は非交換型で対話が続いていく。

それに対して低年齢層群では、聞き手の合いの手の入れ方が異なる。

(22)(Y3)

UU act	UU	Utterance
	init ₉₂ 148.1	B: で
	cont ₉₂ (148.1) 148.2	: ブレーキを踏めばよかってん
	*ack ₉₂ 149.1	A: ん
	init ₉₃ 150.1	B: けど
	cont ₉₃ (150.1) 150.2	: なんかひゅって
	cont ₉₃ (150.2) 150.3	: ハンドル切ったら
	ack ₉₃ 151.1	A: ん
	init ₉₄ 152.1	B: *もうこんなん
	cont ₉₄ (152.1) 152.2	: こんなん(左右に大きくからだを揺らす動作)
	cont ₉₄ (152.2) 152.3	: こんなんって*(上に同じ)
	ack ₉₄ 153.1	A: *(笑)
	init ₉₅ 154.1	B: (笑)もう全然
	cont ₉₅ (154.1) 154.2	: いうこときかんくってそのまま*
	ack ₉₅ init ₉₆ 155.1	A: *それは何
	cont ₉₆ (155.1) 155.2	: あ
	cont ₉₆ (155.2) 155.3	: 雪の日とかじゃなくて雨の日とか
	ack ₉₆ init ₉₇ 156.1	B: 三月
	cont ₉₇ (156.1) 156.2	: ちょっと雨降ってたかな
	ack ₉₇ init ₉₈ 157.1	A: んでそいでたんぼに落ちたんそれ
	cont ₉₈ (157.1) 157.2	: えー*
	init ₉₉ 158.1	B: *そしてその*
	cont ₉₈ (157.2) 159.1	A: *こう
	cont ₉₈ (159.1) 159.2	: たて向きに
	cont ₉₈ (159.2) 159.3	: *なにそれ
	ack ₉₈ init ₁₀₀ 160.1	B: *わたしほんとにまっさかさまにひっくり返って
	cont ₁₀₀ (160.1) 160.2	: こう
	ack ₁₀₀ init ₁₀₁ 161.1	A: へいじゃあなた*
	ack ₁₀₁ init ₁₀₂ 162.1	B: *天井が下で*

ack ₁₀₂	init ₁₀₃	163.1	A:	*あなたが上向いてこう*(笑いながら)
	ack ₁₀₃	164.1	B:	*そうそう
	init ₁₀₄	164.2	:	あらって
ack ₁₀₄	init ₁₀₅	165.1	A:	でもこっちよりいいんじゃない(下向きの動作)
	ack ₁₀₅	166.1	B:	(笑)
	init ₁₀₆	167.1	A:	たんぼなかこう突っ込んだよりは*
	ack ₁₀₆	168.1	B:	*はあそうかなあ
	init ₁₀₇	168.2	:	でも無傷やったよ
ack ₁₀₇	init ₁₀₈	169.1	A:	いやんさすが*
	ack ₁₀₈	170.1	B:	*そうやる
	init ₁₀₉	171.1	A:	さすが大きい人って*(不明)ねって感じ
	ack ₁₀₉	172.1	B:	*(笑)

(汎用「承認」には ack の前に*を付した。)

この対話においても B が語り手となって A が聞き手となっている。がしかし高年齢層群の対話とは異なり、聞き手は汎用「承認」だけを用いて聞いているわけではない。DU を開始し、新たな内容を聞き手も生み出していくことで対話が進んでいく。つまり低年齢層群の対話では、語り手・聞き手は交替しないが、発話番の交換は頻繁に起こっているのである。

このように、高年齢層群の対話は発話番非交換型であり、低年齢層群の対話は発話番交換型である。

高年齢層群に「承認」+「始動」という UU が少ないということは、対話の心理的なテンポにも影響を与えているのではないだろうか。UU に「承認」+「始動」を付すということは、一つの発話が 2 つの機能を持つということである。高年齢層群に「承認」+「始動」が少ないということは、新たな DU を始めるためにはもう一つ別の発話が必要となるということである。基盤化がていねいに行われているということであるが、言い換えれば、省略が可能なところも略さずにいるということである。「若い人はわかりが早い」「年寄りはずっくりしている」あるいは若者からみて「年寄りは話しがまだるっこい」などの印象は、高齢者の方が発話番当たりの発話量が少なく、発話速度が遅い (Kemper & Vandeputte, 1995) からであるという理由だけではなく、2 つの機能を持つ発話が少ないことから来ているのではないだろうか。

6.3 「承認」の種類

高年齢層群は汎用「承認」を多用する

「承認」の割合を見てみると、高年齢層群は汎用「承認」が多いということがわかった（全「承認」中の42.8%。低年齢層群は22.4%）。汎用「承認」は証拠性が弱く、相手の発話への理解を伴わない場合でも行うことができる。したがって汎用「承認」を行っている側は必ずしも相手の発話を理解しているとは限らないのである。本当に理解していないから証拠性の弱い発話が多くなるのか、証拠性の弱い発話が多いために理解していないかはわからないが、この特徴は「お年よりはものわかりが悪い」などの印象の原因となっていると予想できる。

6.4 基盤化終了の共通理解

高年齢層群は基盤化終了後も基盤化終了発話を繰り返す

「承認」後に「承認要求」を行うのは、相手からの積極的な証拠を不十分としているからである。相手の「承認」に対してさらに「承認」を繰り返し行う場合も、基盤化が十分でないと感じられる場合に起こると考えられる。高年齢層群において少数ながらもこのような例が見られたのは、基盤化の終了地点に対する共通理解が年齢層によって異なるからかもしれない。「年寄りの話しは繰り返しが多い」という印象は、実際に繰り返しが多いことだけに起因するのではなく、基盤化終了地点に対する要求水準の違いにもあることが示唆される。

6.5 対話に対する協力姿勢

高年齢層群はより協力的なしかたで対話を行う

共同補完は、数は少ないながら高年齢層群に多く見られた。高年齢層群では、片方が喚語困難状態にあるとき、他方がそれを補うという形で共同補完が起きていると考えられる。高齢者は発話速度が遅くなり、ことばを思い出しにくくなるが、それを補うような形で対話が行われていると考えられる。

相手のことばの全部または一部を使っての繰り返し応答も高年齢層群でやや多く見られた。繰り返しは個人間の係わり（interpersonal involvement）を作り出す（Tannen, 1989）が、共同補完とあわせて考えると、高齢者の対話への姿勢はより協力的なものであるのかもしれない。

共同補完は、知り合い期間の長短と関係があるかもしれない。知り合い期間が長くなれば、共同体的な共通基盤も増える。私的な共通基盤も蓄積されていき、相手の発話への類推も働きやすくなるだろう。しかし今回得られたデータでは、低年齢層群で最も多く共同補完が見られたペア（このペアは繰り返し応答もまた最も多かった）の知り合い期間は、3ヶ月であった。このことから考えると、知り合い期間の長短と対話の協力姿勢は、関連がないのかもしれない。

6.6 対話の2つの型

以上より、高年齢層群の対話は、

- ・発話番非交換型
- ・汎用「承認」多句型
- ・基盤化強化型
- ・高協力型

であることがわかった。このような対話を、特徴の一つを取って「発話番非交換型」

その逆の特徴を持つ対話を「発話番交換型」と呼ぶことにしよう。

今回得られたデータを、高年齢層群、低年齢層群という群ではなく、個別に見てみると、低年齢層群の中の Y1 は以下のように発話番非交換型の特徴を示していた。

表 6.3 (高年齢層群の平均と Y1 の比較 : 「承認」と共同補完・繰り返し応答のみ)

	高年齢層群の平均	Y1
承認 + 始動	10.2 (10.3%)	17 (18.7%)
承認 (汎用)	40.6 (42.8%)	38 (41.8%)
承認 (非汎用)	45 (46.9%)	36 (39.6%)
() 内の % は全 ack 数に占める割合		
共同補完	2.6	4
繰り返し応答	4.6	4

Y1 を高年齢層群の平均と比較すると、特に「承認」+「始動」の割合、汎用「承認」の割合、共同補完、繰り返し応答の点で、類似している。これは高年齢層群の特徴が、どの年齢に見られる可能性があることを示唆している。

つまり対話には発話番非交換型と発話番交換型の 2 つの型があり、高年齢層群には発話番非交換型が、低年齢層群には発話番交換型が多く観察されたのである。

6.7 対話の「わかりやすさ」とは

本研究の目的は対話における高齢者の「ものわかり」の悪さを実証的に検証するものであったが、その奥には、対話の「わかりやすさ」とはどのようなものであるのか、という疑問があった。一般に対話の「わかりやすさ」について考えてみると、話し手が聞き手の背景知識やその時の要求に沿って対応をするという場面が思い浮かぶが、そのとき聞き手は、わからないことを質問してわかりを強めようとするのではないだろうか。つまり、問いを発したり、聞き返したり、より証拠性の高い承認を行ったり

して、自分自身のわかり具合を相手に伝えようとするのではないだろうか。そのように考えると、汎用「承認」が多い発話番非交換型の対話は、わかりにくいという印象を与えるものであると言えるだろう。

7. おわりに

本研究の目的は、「年よりはものわかりが悪い」と言われる印象の原因を探ることにあった。そのような印象の要因として、高齢者と若年成人の対話過程には、(1) 身体機能の低下、特に耳が聞こえにくくなることから来る違い(2) 対話方略の変化から来る違い(3) 理解の度合いに対する要求水準の変化から来る違い(4) ある専門領域に長けたため、その領域から離れたことが受け入れにくくなることから来る違い、があるのではないかと考えた。本研究では、基盤化理論の枠組みを使って、特に(2)に関する検証を行った。

まず高年齢層群(80歳代女性)と低年齢層群(20~30歳代女性)の対話について予備観察を行い、基盤化終了地点を示す「承認」、繰り返し、沈黙に関する違いを見つけた。

次に予備観察で得られた視点をもとに、観察を行った。高年齢層群(平均年齢83歳)と低年齢層群(平均年齢30.9歳)の協力者に、同年代同士2人で1組になって日常会話を行ってもらい、これを収録・分析した。対話は、高年齢層群が普段から利用している老人福祉センター、低年齢層群は職場敷地内にある別棟別室で行ってもらった。協力者は全員が女性であった。分析した対話は年齢層別に各5対話の計10対話、各5分ずつの計50分である。収録した対話を文字に書きおこし、一つ一つの発話に対し、基盤化アクトを付与した。付与の信頼性を検証する実験を行い、信頼できるとの結果を得た。

観察の結果、対話には2つの型があることがわかった。一つは、発話番非交換、汎用「承認」多用、基盤化強化、高協力という特徴を持つ「発話番非交換型」対話である。もう一つは、その逆の特徴を持つ「発話番交換型」対話である。発話番非交換型は高年齢層群に多く見られ、発話番交換型は低年齢層群に多く見られた。

また年齢層別の対話には次の5つの傾向があることがわかった。

1. 基盤化はほぼ同じ大きさの単位で起こっている

UUがほぼ同じであった(高齢者=1406/成人=1309)。DUがほぼ同数であった

(高 = 446 / 成 = 482)。付与した基盤化アクトの割合も年齢による大きな違いはなかった。同時間の対話において基盤化数がほぼ同数であるということから、「年寄りになったら、対話の理解により多くの発話を要するようになる」わけではない、ということがわかった。

2. 高年齢層群は発話番非交換型の対話を行う

「ものわかり」という観点から、基盤化を終了させる「承認」アクト（聞き手の理解や注目を意味する）に絞って分析をした。発話の中には質問に答えるなど、前の発話の意味の理解を示し、同時に新しい内容を始めるものがある。このような発話は、高年齢層群では10%、成人では27%となり有意な差が見られた。さらに実際の対話を詳しく見ていくと、高年齢層群の対話は発話番非交換型傾向を、低年齢層群の対話は発話番交換型傾向を持つことが観察された。「承認」+「始動」が少ないということは、新たなDUを始めるためにはもう一つ別の発話が必要となるということである。そのため対話のテンポが遅く感じられ、「若い人はわかりが早い」「年寄りはゆっくりしている」あるいは若者からみて「年寄りは話しがまだるっこい」などの印象が形づくられると予想できる。

3. 高年齢層群は汎用「承認」を多用型の対話を行う

承認アクトのみが付された発話を、汎用的なもの（「ん」「うん」やうなづきなど発話内容によらずに汎用的に使えるもの）と非汎用的なものとの分けると、高年齢層群では汎用承認が多く（43%）、低年齢層群では少ない（22%）ことがわかった。汎用「承認」を多用する対話は、話し手の発話を、聞き手がしっかりわかってくれたと話し手が判断するための証拠性に乏しいということの意味する。このような証拠性の弱い発話が「年よりはものわかりが悪い」という印象の原因になっていると予想できる。

4. 高年齢層群は基盤化終了後にも基盤化終了発話を繰り返す

高齢者の対話に、すでに基盤化が終わったという発話がなされた後に、さらに基盤化を要求する発話が、少数ながら見られた。基盤化の終了地点に関する共通理解は、年齢層によって異なるのかもしれない。「年寄りの話しは繰り返しが多い」と

いう印象は、実際に繰り返しが多いことだけに起因するのではなく、基盤化終了地点に対する要求水準の違いにもあることが示唆される。

5. 高年齢層群はより協力的なしかたで対話を行う

数は少ないながら共同補完が高年齢層群に多く見られた。繰り返し応答も高年齢層群にやや多く見られた。繰り返しは個人間の関わりを作り出す。共同補完とあわせ、高年齢層群は対話に対して協力的な姿勢を持っている可能性がある。

「年よりはものわかりが悪い」という印象は、特に高齢者の発話番非交換型・汎用「承認」多用途対話に原因のあることが示唆された。しかし高齢者が、基盤化終了後も基盤化終了発話を繰り返す点と、対話に対して協力的な態度を持っている点に関しては、十分なデータを持って結論するには至らなかった。また発話交換に関しても定量的なデータは示せなかった。知り合い期間の長短と対話方略との関係については、条件をそろえての観察が必要である。本研究で得られた結果は、女性の対話に関するものである。ジェンダーの違いに着目した研究も、今後行われるべきものであろう。

また発話の機能面だけからでは分析できない部分が残った。例えば以下の UU140.1 は機能的には DU#73 (UU139.1 ~ UU139.4) の「承認」と考えられるが、そのすぐ後に続けて言われた UU140.2 「そんな人らたくさん来ておいでた」という発話の意味を考えると DU#73 に対する「承認」であるかどうかは大いに疑問である。さらに整合性がとれないことを裏付けるかのように、UU141.1 は非常に高い調子で発話されていた。

(23) (O1)

UU act	UU	Utterance
init ₇₂	137.1	A: 白山さんめいりゃいいし*(白山比咩神社にお参りすればいいし)
ack ₇₂	138.1	B: *おそやそや
init ₇₃	139.1	A: おいで
cont ₇₃ (139.1)	139.2	: めいっておいでまた(参ってそしてまた)
cont ₇₃ (139.2)	139.3	: あの後にごはん食べんなんさけに (その後でご飯を食べなければならないから)

cont ₇₃ (139.3)	139.4	:	ばあちゃんいっしょに*いらんし (おばあちゃんも一緒にいらっしやい)
ack ₇₃ init ₇₄	140.1	B:	*ああんたあの
cont ₇₄ (140.1)	140.2	:	そんな人らたくさん来ておいでた
ack ₇₄	141.1	A:	ほー
init ₇₅	141.2	:	やっぱりね
ack ₇₅	142.1	B:	ん

この例のように基盤化の成功・失敗に関わり、機能面では表わし切れない部分をどのように分析していくのか、さらにたくさんの具体的な対話を分析する中で解決すべき課題である。

参考文献

- Bortfeld,H., Leon,S.D., Bloom,J.E., Schober,M.F., & Brennan,S.E.(2001). Disfluency Rates in Conversation: Effects of Age, Relationship, Topic, Role, and Gender. *Language and Speech*.
- Clark,H.H.(1996). *Using language*. Cambridge University Press.
- Fleiss,J.L.(1981). *Statistical Methods of Rates and Proportions*. John Wiley & Sons, Inc.
- 福田恵・伊藤信子・佐藤眞一.(2000). 高齢者における他者感情の理解. *高齢者のケアと行動科学*.
- 堀内靖雄・中野有紀子・小磯花絵・石崎雅人・鈴木浩之・岡田美智男・仲真紀子・土屋俊・市川薫.(1999). 日本語地図課題対話コーパスの設計と特徴. *人工知能学会誌*.
- Horn, J.L. & Cattell, R.B.(1966).Refinement and test of the theory of fluid and crystallized intelligence. *Journal of Educational Psychology*
- 稲生勁悟・佐々木正伸ら.(1992). *高齢者教育テキストブック*. 東京教科書出版株式会社.
- 漁田武雄・漁田俊子.(1996). 『高齢者介護の政策課題』より 第12章 加齢にともなう認知機能の変化と環境的補助. 勁草書房.
- 片桐恭弘・下嶋篤・Marc Swerts・小磯花絵.(1999). 対話における繰り返し応答の韻律と機能. くろしお出版.
- 河野理恵.(1999). 高齢者のメタ記憶 - 特性の解明、および記憶成績との関係. *教育心理学研究*.
- Kemper,S. & Vandeputte,D.(1995). Speech adjustments to aging during a referential communication task. *Journal of Language & Social Psychology*.
- 厚生省編.(1999). *厚生白書平成11年版*. ぎょうせい
- メイナード,泉子・K.(1993). *会話分析*. くろしお出版.
- 増田真也・坂上貴之・広田すみれ.(1997). 高齢者の意思決定：選択からの逃避. *心理学評論*.
- 直井道子・堀薫夫.(1996). 『生涯学習の現代的課題』より 第一章 高齢化社会と高齢期の特性. 財団法人全日本社会教育連合会.

- 長嶋紀一.(1970). 老年者の知的機能の衰退について. 浴風園紀要.
- 西阪仰.(1997). 相互行為分析という視点. 金子書房.
- Ryan,E.B. & See,S.K.(1992). Age-based perceptions of language performance among younger and older adults. *Communication Research*.
- Ryan,E.B. & Hummert, M.L.(1995). Communication predicaments of aging: patronizing behavior toward elder adults. *Journal of Language & Social Psychology*.
- 谷口幸一編著.(1997). 成熟と老化の心理学. コレール社.
- 辰巳格.(1997). 加齢現象としての喚語困難. 言語.
- Tannen,D.(1989). *Taking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Cambridge University Press.
- Traum,D.R.(1994). *A Computational Theory of Grounding in Natural Language Conversation*. Technical Report. University of Rochester.
- Traum,D.R. & Allen,J.F.(1994). *Discourse Obligations in Dialogue Processing*. Thirty-Second Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics.
- 宇野正威.(1997). もの忘れはなぜ起こるのか. 言語.
- 宇良千秋・矢富直美.(1997). 高齢者の笑いの表情に対する年齢と認知能力の影響. 発達心理学研究.
- 横内幸子.(1964). 聴力の生理的年齢変化について. 日本耳鼻学会誌.

付録

基盤化アクト付与信頼性検証実験手引書

高齢者同士の対話と20歳台・30歳代の人同士の対話を比較して、俗に「年寄りなものわかりが悪い」と言われる現象について研究をしています。実際に収集した対話データに対して、研究者である私の行っている作業がどれほど信頼性のあるものなのかを検証するために、この実験を企画しました。まず実験前にこの手引書を読み、内容をよく理解した上で作業を行ってくださるようお願いいたします。

なお、実験に協力してくださった方に、お礼を用意させていただきました。実験終了後にお支払いいたします。

この手引書には以下の内容が書かれています。

1. 作業内容の概要
 2. 分類方法
 - A. 基本概念
 - B. 各アクトの定義
 - a. init (始動) / cont (継続) / ack (承認)
 - b. repair (修理)
 - c. reqRepair (修理要求) / reqAck (承認要求)
 - d. cancel (キャンセル)
 - C. 基盤化アクト出現の規則
 3. 付与に関する注意点
 - A. 基盤化アクトが付与されないUU
 - B. 二つの基盤化アクト(ackとinit)が付与されるUU
 - C. 同時発話の場合の付与の仕方
 - D. 「ことば」以外のUUに対する基盤化アクトの付与
 - E. 書きおこしデータの表記方法
 4. 付与手順
- 練習問題
練習問題の答え

1. 作業内容の概要

二人の人が特に話題を定めず、30分から1時間程度話しをしました。その内の5分間を文字に書きおこしました。書きおこしたデータはイントネーションやポーズによってある単位に区切られています。この区切られたデータを分類してください。必要ならば元の音声聞いてください。

以下にどのように分類するかについて説明をします。

2. 分類方法

対話を分析するにはいろいろな方法がありますが、この研究では一つ一つの発話単位に「基盤化アクト」と呼ばれるものを付与し、それに基づいて分析を行っています。分類を行うにあたり、いくつかの基本的な概念を理解してもらう必要がありますので、まずそれを説明します。

A. 基本概念

今回作業の対象となるデータは、イントネーションやポーズによって発話単位に区切られています。発話とは、口に出された一区切りのことばを指します。このことばは英語で、Utterance Unit というので、以下、このことばを UU と呼ぶことにします。これが基本単位となります。

この UU よりも大きな単位として、談話単位というものがあります。(談話単位の英語は、Discourse Unit なので、以下これを DU と呼びます。) ある人が何かを言い始めるとします。これが一つの発話になります。この発話が当事者間で理解され、二人の間で二人の共通基盤になるまでの範囲を、DU と呼びます。以下の例を見てください。

	B :	あのね
	A :	ん
	B :	教習
	:	車の教習所に通ったときに
	A :	ん

この欄は次節で説明します。

この場合、「あのね」で始まった B の発話は、次の A の発話「ん」によって二人の共通基盤になったと言えます。A のこの「ん」は、B の発した「あのね」を理解した、という意味で、さらに A が「ん」と発話することによって、B にも「A は自分の言ったことを理解してくれたんだ」ということがわかるからです。ここで二人の間に共通の認識が生まれたと考えられます。したがって、<B : 「あのね」 A : 「ん」> で一つの DU が構成されます。

その次に続く B の「教習」「車の教習所に通っていたときに」という二つの発話に対して、A はそのすぐ後で「ん」と発話していますが、これもその時点で A は B の言うことを理解した、と解釈されます。これも最初の A の「ん」と同じように、A がこう言うことによって B は「自分の言ったことを A はわかってくれた」と想定することができます。つまりこの時点で B の「教習」「車の教習所に通っていたときに」は、二人の間の共通基盤になった、ということになるので、この部分がまた別の DU となります。

上の例には以下のように2つの DU から構成されることとなります。

	B :	あのね	} 一つの DU
	A :	ん	
	B :	教習	} 一つの DU
	:	車の教習所に通ったときに	
	A :	ん	

片方が発話によって新しい内容を提示し、その内容が二人の間で共通基盤になったとき、その DU は終了します。そしてほとんどの場合、次の DU が始まります。

繰り返しますと、上の例では、Bはまず「あのね」と新しい内容を提示しています。その内容はそのすぐ次のAの「ん」によって二人の共通基盤となりました。ここでそのDUは終了します。ですからBが次に「教習」と言いかけたときには、新しいDUが始まることとなります。続けてBが発話していますので、その時点では、その発話が二人の共通基盤となっているかどうかはわかりません。Bが「車の教習所に通っていたときに」を発話し終わり、Aが「ん」と発言した時点で、Bは自分の「教習」「車の教習所に通っていたときに」という発話がAによって理解されたという証拠を得たことになるので、このDUはこの時点で終了します。

対話ではこの例の言い換え（Bは「教習」を「車の教習所」と言い換えています）のように、他方の返事がないままに発話を始めた人が発言を続けることがあります。この場合も、片方が始めた発話が二人の共通基盤になった時点でDUは終了します。

また対話では、相手の発話がよく聞こえなかったり、理解できなかったりという理由などで聞き返すこともあります。聞き返すということは、片方の発話を他方が理解していないということですから、この場合は、話者が交代したからといってDUが終了するわけではありません。DUはあくまでも二人の間でどちらからの始めた発話が共通基盤になったときに終了するのです。

ある発話が当事者間で理解され、二人の間で二人の共通基盤になるまでの範囲をDUと呼びます。

このようにDUは新しい内容の提示で始まり、それが二人の間で共通基盤になったときに終了します。（そしてほとんどの場合、また新しいDUが始められます。）したがって一つのDUは2つ以上のUUで構成されることとなります。このUUを機能によって分類したものが基盤化アクトです。次の節で、一つ一つの基盤化アクトの定義と現れ方の規則について説明します。

B.各アクトの定義

では、次に基盤化アクトという分類の枠組みについて説明します。基盤化アクトは7つあります。これを順に説明していきます。

英語	日本語	内容
init(iate)	始動	DUを構成する最初の発話。
cont(inue)	継続	同じ話し手によってなされるすぐ前の発話の継続。
ack(nowledge ment)	承認	すぐ前の発話の理解を主張・示威する発話。
repair	修理	DUの内容の変更。
req(est)Repair	修理要求	他者による修理の要求。聞き手には答えるという義務が生ずる。この場合新しい内容は付け加わらない。
req(est)Ack	承認要求	他方の主体に、すぐ前の発話に対して承認を要求する。聞き手には答えるという義務が生ずる。
cancel	キャンセル	init(始動)をしたがack(承認)を待たず、そのDUを放棄すること。

a. init(始動) / cont(継続) / ack(承認)

init(始動): DUを構成する最初の発話。

cont(継続): 同じ話し手によってなされるすぐ前の発話の継続。

ack(承認): すぐ前の発話の理解を主張・示威する発話。

まずこの3つについて例を使って説明をします。以下を見てください。

	B :	うん
	A :	だって今
	:	なんで時計を見たかというと
	B :	うん

この場合、Bの「うん」に続いてAが「だって今」と発話をはじめています。ここでは書いていませんが、Bの最初の「うん」はその前の発話に対する返事なので、このAの「だって今」がDUを構成する最初の発話ということになります。続いてAは「なんで時計を見たかというと」と続けていますが、Aの「だって今」と「なんで時計を見たかというと」の間にBは何も言っていませんから、Aの「なんで(後略)」という発話は「だって今」のcont(継続)ということになります。Bの二番目の「うん」はすぐ前の発話を理解していることを示すので、ack(承認)になります。下のように基盤化アクトが付けられます。

ack	B :	うん	} 一つのDU
init	A :	だって今	
cont	:	なんで時計を見たかというと	
ack	B :	うん	

b. repair (修理)

repair (修理): DU の内容の変更。

	B :	バックミラー
	:	やっけ
	:	ルームミラー
	A :	ん

Bは「バックミラー」と発話しますが、言いながら言いたいことが違っていったということに気が付いて自分で言い直しています。この場合、以下のように基盤化アクトを付与します。

init	B :	バックミラー	} 一つのDU
cont	:	やっけ	
repair	:	ルームミラー	
ack	A :	ん	

c. reqRepair (修理要求) / reqAck (承認要求)

reqRepair (修理要求): 他者による修理の要求。聞き手には答えるという義務が生ずる。この場合新しい内容は付け加わらない。

reqAck (承認要求): 他方の主体に、すぐ前の発話に対して承認を要求する。聞き手には答えるという義務が生ずる。

	A :	結構たくさん入ってるが
	B :	えっ
	A :	結構たくさん入ってるがや
	B :	ほうか

この場合、A は「結構たくさん入ってるが」と発話していますが、B はなんらかの理由で（聞き取れない、理解できないなど）「えっ」と聞き返しています。（この時点ではまだ A の「結構たくさん入ってるが」という発話は二人の共通基盤になっていません。）このように片方の発話に対して、他方が repair（修理）を求めるような発話をした場合、これが reqRepair（修理要求）となります。

init	A :	結構たくさん入ってるが	} 一つの DU
reqRepair	B :	えっ	
repair	A :	結構たくさん入ってるがや	
ack	B :	ほうか	

A はそれに対して「結構たくさん入ってるがや」と repair（修理）を行っています。A のその発話を聞いて、B は repair（修理）された内容がわかったので「ほうか」と発話しています。この時点で A の始めた「結構たくさん入っているが」が二人の共通基盤となったので、ここでこの DU が終了します。

reqRepair（修理要求）は「えっ」というような発話であるとは限りません。意味内容を確認するような発話にも付与されます。

	A :	ばあちゃん
	:	わたしらんばあちゃん
	:	あの
	B :	母親か
	A :	なあもばあちゃん
	B :	ああ年寄りばあちゃんか

この例では、A の言う「ばあちゃん」が B には何を指しているのかがわからず、B は「母親か」と意味内容を確認する発話を行っています。それに対して A は「なあもばあちゃん」と意味内容を確定しています。それを聞いて、B は A の言う「ばあちゃん」が何を指しているのかがわかったので、わかった旨を表わす発話「ああ年寄りばあちゃんか」をしています。この時点で、A の始めた発話が二人の間の共通基盤になりました。以下のように基盤化アクトが付与されます。

init	A :	ばあちゃん	} 一つの DU
cont	:	わたしらんばあちゃん	
cont	:	あの	
reqRepair	B :	母親か	
repair	A :	なあもばあちゃん	
ack	B :	ああ年寄りばあちゃんか	

reqRepair（修理要求）、repair（修理）、ack（承認）は、イントネーションの違いによって決まるといふ場合があるので注意が必要です。要求の場合は相手に答えを求めるような疑問のイントネーションとなります。

	B :	今浜崎あゆみになっちゃった
	:	たっけ
	A :	そかも

上の例では、Bは「今浜崎あゆみになっちゃった」という発話の後に「たっけ」と疑問のイントネーションで発話を続けています。この場合は、自分の言ったことに対して承認を求めていると考えることができるので、このBの「たっけ」という発話に reqAck (承認要求) を付与します。

init	B :	今浜崎あゆみになっちゃった	} 一つの DU
reqAck	:	たっけ	
ack	A :	そかも	

しかし疑問のイントネーションを持つ発話がすべて reqAck (承認要求) になるわけではありません。質問の形で DU が始めれば、それは init (始動) となります。すぐ前の発話に続いてなされれば cont (継続) となります。上の例のように「たっけ」「ね」「でしょ」など、単独で ack (承認) を要求する UU に reqAck (承認要求) を付与します。

d. cancel (キャンセル)

cancel (キャンセル): init (始動) をしたが ack (承認) を待たず、その DU を放棄すること。

	A :	袋に入って
	:	一袋いくらやったが
	:	いやー
	:	結構たくさん入ってたが

この場合、Aは値段(「一袋いくらやったが」)についての発話をしますが、その発話に対する承認を待つことなく、量(「結構たくさん入ってたが」)についての発話に転換しています。この場合、その間に挟まっている「いやー」を cancel (キャンセル) と解釈します。

init	A :	袋に入って	} 一つの DU
cont	:	一袋いくらやったが	
cancel	:	いやー	
init	:	結構たくさん入ってたが	

以上、7つの基盤化アクトについて説明しましたが、必ずしもすべてのアクトが実際のデータに現れるとは限りません。

C. 基盤化アクト出現の規則

繰り返しになりますが、ある発話が当事者間で理解され、二人の間で二人の共通基盤になるまでの範囲を DU と呼びます。新しい内容の提示を init (始動) と定義したので、DU は必ず init (始動) で始まります。そして二人の間である発話が共通基盤になったということは、その発話が ack (承認) されたということですから、基本的に一つの DU は、init (始動) で始まり ack (承認) で終わるという形を取ります。つまり、

init (始動) [init または ack 以外の基盤化アクト] ack (承認)

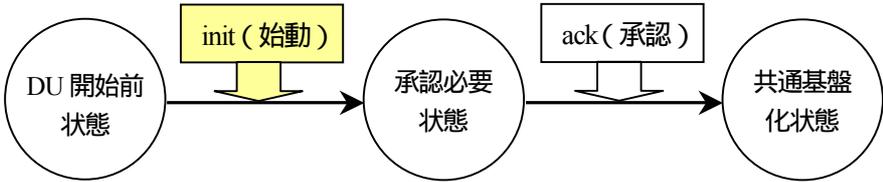
というのが一つの DU 中の基盤化アクトの現れ方の基本規則となります。

理解を深めるためにこれを対話の状態という角度から眺めてみます。対話は、DU が開始されていない状態から、その発話が二人の間で共通基盤になった状態へ移行することになります。これを最初の例にあてはめて説明します。

init	B :	あのね
ack	A :	ん

この二つの発話が一つの DU を構成しているのは前に説明した通りです。まず B が「あのね」という前の状態があります。これは DU 開始前状態です。この状態で B が「あのね」と発話しました。すると状態は相手からの応答が必要な状態に変わります。B は A に向かって「あのね」と言っているので、この発話が A に理解され、そのことが B にもわかる必要があるからです。これは承認が必要とされる状態です。その状態にあるときに A が「ん」と発話しました。すると状態はまた変化し、今度は「あのね」という発話が二人の共通基盤になった状態に移行します。

つまりある状態において、なんらかの発話(アクト)がなされると、別の状態に移動することになります。これを図示すると次のようになります。



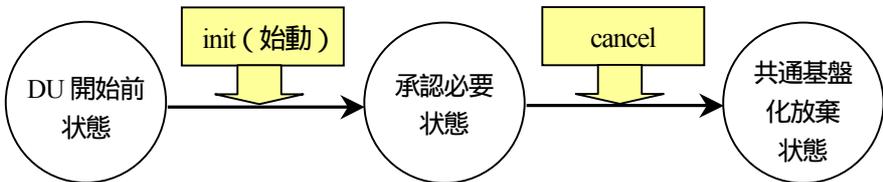
このように、対話においては、発話がなされる度に、ある状態から別の状態へ移行すると考えることができます。

この図には書き込んでいませんが、init (始動) と ack (承認) が同じ人によってなされるということはありません。それでは init (始動) した発話が二人の共通基盤となったとは言えないからです。

ある発話が二人の間で共通基盤にならないときもあります。それはその発話が cancel (キャンセル) されたときです。この場合は、

init (始動) [init または ack 以外の基盤化アクト] cancel (キャンセル)

という風に基盤化アクトが現れます。状態から見ると、DU 開始前状態から、ある発話がなされ、承認必要状態に移行し、その後また別の発話がなされ、共通基盤化放棄状態に移行します。



この場合、cancel (キャンセル) も基本的には init (始動) を行った人によってなされます。

その他の基盤化アクトの現れ方にも規則があります。例えば、init (始動) の後に来るのは、同じ人による cont (継続)・repair (修理)・reqAck (承認要求)・cancel (キャンセル) と、相手による repair (修理)・reqRepair (修理要求)・ack (承認) のみです。私たちが日常行っている対話を思い浮かべてみれば、この規則を理解するのはそれほど難しいことではありません。話しを始めた (init) 人は、話しを続けたり (cont) 言い間違いを直したり (repair) 同意や応答を求めたり (reqAck) 別の話しを始めたり (cancel) します。そして聞いている人は、相手の間違いを直したり (repair) 内容をはっきりさせるように聞きただしたり (reqRepair) わかったと言ったりうなづいたり (ack) します。

この最初の部分についてまとめると、以下のようになります。

DU 開始前状態	
init (始動)	
承認が必要な状態	
同じ人の発話	
cont (継続)	承認が必要な状態
repair (修理)	承認が必要な状態
reqAck (承認要求)	承認が必要な状態
cancel (キャンセル)	共通基盤化が放棄された状態
相手の発話	
repair (修理)	repair に対する承認が必要な状態
reqRepair (修理要求)	修理が必要な状態
ack (承認)	共通基盤化が終了した状態

つまり自分で始めた話しが、相手によって続けられることはありません。自分で自分の言ったことにわかったと言うこともないし、自分の言ったことに相手が「わかった？」と聞くこともありません。

この規則は、自然な対話を分析して、そこから生まれてきたものです。もちろん例外はありますが、基本的には、自然な流れに沿って基盤化アクトが付与されます。その他にも規則はありますが、今回の実験では、DU は init (始動) で始まり ack (承認) で終わる、という大原則を押さえ、各アクトの定義に沿った形で基盤化アクトを付与してもらうことにします。

例外の一つに、二人が同時に発話を始めてしまい、片方が他方に発話権を譲ったため、譲った方の init (始動) が ack (承認) されないままになってしまうような場合があります。この場合譲った方の init (始動) は二人の共通基盤とはなりません。また明示的な cancel (キャンセル) とも言えません。このような発話は単に打ち捨てられたままになってしまいます。

3 . 付与に関する注意点

基本的には一つの UU には一つの基盤化アクトが付与されますが、中には基盤化アクトが付与されない UU、二つの基盤化アクトが付与される UU もあります。それらについて説明します。

A. 基盤化アクトが付与されない UU

次のような場合には基盤化アクトを付与しないことにします。

	B :	やっぱ外へ*出てくっと
	A :	*ん
	:	そやそや

この例では、AはBの発話の最中に「ん」と発話しています。（*はその文字の部分でほぼ同時に発話されたことを意味します。）そしてBの発話が終わってから、「そやそや」と発話しています。このような場合、Aの最初の「ん」には基盤化アクトを付与しないことにします。

init	B :	やっぱ外へ*出てくっと
	A :	*ん
ack	:	そやそや

一つの DU

その他、ある DU が終了した後に新たな発話を始める場合、「うん」などと言ってから始める場合がありますが、その場合、その UU には基盤化アクトを付与しないことにします。また一つの DU が終了した後で、「うーん」「あぁ」などの独り言ともななんとつけない発話を行うような場合にも、その UU には基盤化アクトを付与しないことにします。さらに発話の途中でリズムを取るために「ん」「ん」などを挟み込むことがありますが、これにも基盤化アクトは付与しないことにします。

B.二つの基盤化アクト (ack と init) が付与される UU

次のような場合には、一つの UU に ack (承認) と init (始動) を付与することにします。

	B :	どこ行ったの
	A :	どこか知らない
	:	野々市の方なのかな

この場合、Aの「どこか知らない」という発話には、そのすぐ前のBの発話「どこ行ったの」という質問を理解したということを示しているため、ack (承認) を付与することができます。同時に、「どこか知らない」ということは、新たな DU の始まりとなるので、init (始動) を付与することもできます。

init	B :	どこ行ったの
ack init	A :	どこか知らない
cont	:	野々市の方なのかな

一つの DU
一つの DU

質問のイントネーションを持つ UU 以外でも同じように付与する場合があります。下の例を見てください。

	B :	なんかだから
	:	あんまり
	A :	うん
	B :	飲んだらだめだよって
	A :	お湯を飲むな

最後のAの「お湯を飲むな」という発話は、そのすぐ前のBの「飲んだらだめだよって」に対する理解を示すと同時に、新たな DU を始めることになっています。そこでこのような場合にも先の例と同じように基盤化アクトを付与します。

init	B :	なんとかだから	} 一つの DU
cont	:	あんまり	
ack	A :	うん	} 一つの DU
init	B :	飲んだらだめだよって	
ack init	A :	お湯を飲むな	

一つの UU に二つの基盤化アクトを付与するのは、この [ack init] のパターンだけです。

C. 同時発話の場合の付与の仕方

一つの DU が終わってから次の DU が始まるのが対話の基本ですが、二人がほぼ同時に発話を始めることもあります。その場合は同時に DU が始まることとなります。このような場合、文字に書きおこす制約上どちらかの発話を先に書いていますが、実際はほぼ同時に言われているので、init (始動) が二つ並ぶようになります。以下の例を見てください。

	A :	*結構買ってるんやん
	B :	*シーガルフォード
	A :	あそうかな

この場合、A の「結構買ってるんやん」と B の「シーガルフォード」はほぼ同時に発話されています。(* は同時に発話されたことを示しています。) A は「結構買ってるんやん」という自分の発話に対する B からの承認を待たずに、「あそうかな」と B の発話に対して承認をしています。

init	A :	*結構買ってるんやん	} 一つの DU
init	B :	*シーガルフォード	
ack	A :	あそうかな	

この場合、A の「結構買ってるんやん」に対する ack (承認) はありません。この場合は、この発話は共通基盤となりませんでした。これは基盤化アクト出現規則の例外にあたります。自然な対話においては、このような例外が起こりうる場合があります。それぞれの発話の機能に基づいて分類してください。

D. 「ことば」以外の UU に対する基盤化アクトの付与

対話の中では、「ん」などと声に出して言う他、うなづいたり、笑ったりしてすぐ前の発話に対して応える場合があります。下の例では (笑) と書かれた UU に基盤化アクトを付与することにします。

	A :	お金がないのよ*
	B :	*(笑)

B は、A の「お金がないのよ」という発話に対して、笑うことによって応えています。この場合は、A の言ったことがわかって笑っているため、以下のように基盤化アクトを付与します。

init	A :	お金がないのよ*	} 一つの DU
ack	B :	*(笑)	

E.書きおこしデータの表記方法

上にも例で挙げましたが、同時発話の場合は、各 UU の書きおこし文字の前に*をつけています。

ほぼ同時に発話されている場合

init	A :	*結構買ってるんやん
init	B :	*シーガルフォーだ

発話の一部分が重なっている場合は、次のように表記しています。

最後の部分で重なっている場合

init	A :	わたし行かんださけな*
ack	B :	*ほう

この場合は、A の発話の最後「な」の部分に重なるようにして、B が「ほう」と発話しています。

最初の部分で重なっている場合

init	B :	前*
init	A :	*前いっぺん*

この場合は、B の「前(まえ)」という発話の「え」の部分に重なるようにして、A が「前いっぺん」と発話しています。

途中で重なっている場合

init	A :	こん*な変なん
	B :	*ん

この場合は、A の発話の最初の部分「こんな」の「ん」の部分で、B が「ん」と発話しています。

また発話内容の終わりに[0.5]などの数字がついていることがありますが、これは沈黙の秒数を表わしています。

init	B :	*なんか[0.4]
cont	:	まあ

4. 付与手順

上に説明した定義と注意点に基づいて、以下のように基盤化アクトを付与していただきます。

1. 書きおこしたデータを見ながら音声を聞く
2. 基盤化アクトを付与する
3. 音声を聞きながら付与した基盤化アクトを確認する

以上の理解を確認するため練習問題を設けました。前もって行き、答えあわせをしてくださるようお願いいたします。

練習問題

	A :	まったくの*
	B :	*ん
	A :	専業主婦だけっていう期間ってあったんですか
	B :	んあったよ
	:	やっぱり
	A :	子どもさんがちっちゃいとき
	B :	うーんとね
	:	んちょっと子ども
	:	体弱いねんうち下の子が
	A :	ん*
	B :	*で*それで入院しとったときとかももちろん
	A :	*ん
	B :	看病でえ*
	A :	*ん
	B :	病院とかに行ったらし
	:	あと
	A :	*大変
	B :	*なんて言うのかな
	:	ん
	:	なんかまあ
	:	うち下の子がまあとにかく手がかかるえ
	A :	ん*
	B :	*んで
	:	まあ*
	A :	*なんか逆っほいですよ
	B :	ん(疑問のイントネーション)
	A :	普通
	:	上の子が初めてで
	:	手がかかってえ*
	B :	*はあん
	A :	下は結構ほったらかしでも
	:	って言いません
	B :	ああ
	:	でも*
	A :	*ん
	B :	ほら
	:	あの結構子どもって

実際に作業を行ってもらうデータには(疑問のイントネーション)などの注釈はついていませんが、ここでは練習のためにつけています。

練習問題の答え

init	A :	まったくの*
ack	B :	*ん
init	A :	専業主婦だけっていう期間ってあったんですか
ack	B :	んあったよ
init	:	やっぱり
ack init	A :	子どもさんがちっちゃいとき
ack init	B :	うーんとね
cont	:	んちょっと子ども
cont	:	体弱いねんうち下の子が
ack	A :	ん*
init	B :	*で*それで入院しとったときとかももちろん
ack	A :	*ん
init	B :	看病でえ*
ack	A :	*ん
init	B :	病院とかに行っただし
cont	:	あと
ack init	A :	*大変
init	B :	*なんて言うのかな
	:	ん
cont	:	なんかまあ
cont	:	うち下の子がまあとにかく手がかかるえ
ack	A :	ん*
init	B :	*んで
cont	:	まあ*
ack init	A :	*なんか逆っほいですよ
reqRepair	B :	ん(疑問のイントネーション)
repair	A :	普通
cont	:	上の子が初めてで
cont	:	手がかかってえ*
ack	B :	*はあん
init	A :	下は結構ほったらかしでも
cont	:	って言いません
ack	B :	ああ
init	:	でも*
ack	A :	*ん
init	B :	ほら
cont	:	あの結構子どもって